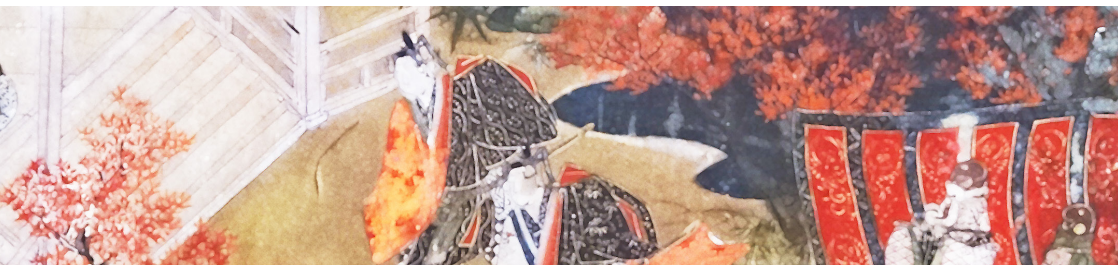


# 海外平安文学 研究

# ジャーナル 3.0

Journal of Heian Literature Research Overseas Vol.3.0



伊藤鉄也 編

<謝辞 Acknowledgement >

本研究は JSPS 科研費 25244012 の助成を受けたものです。

This was financed with JSPS KAKENHI Grant Number 25244012.



## あいさつ

本紙『海外平安文学研究ジャーナル』（オンライン版、ISSN：2188-8035）は、昨秋平成 26 年 11 月に電子ジャーナルとして創刊し、異分野の方々にも温かく迎えていただくことができました。

そして今、その第 3 号ができましたのでお届けします。

今号では、最新情報に加えて、各国語訳『源氏物語』に関する詳細な資料と考察、そして『十帖源氏』に関する考察・情報・資料を掲載することができました。スペインにおける平安文学の研究状況も届いています。

斬新な視点からの問題提起や、得難い資料が揃った本誌電子版で、海外に思いを馳せながらお読みいただくと幸いです。

本課題では、国際的な視野で日本文学および日本文化を見つめることを意識して、さまざまな問題に取り組んでいます。多角的な視点で平安文学を論じた、みなさまからの意欲的な投稿を歓迎します。

これまでに、多くの方々のご理解とご協力をいただきました。改めて、お礼申し上げます。

そして、これからも変わらぬご支援のほどを、どうかよろしく願いいたします。

2015 年 9 月 30 日

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A)

「海外における源氏物語を中心とした平安文学

及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」

研究代表者

大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国立大学法人総合研究大学院大学

国文学研究資料館 伊藤鉄也

## ■ 『海外平安文学研究ジャーナル』 原稿執筆要項 ■

本ジャーナルの原稿を募ります。平安文学に関する論稿等をお寄せください。

- 1 論文分量 400字原稿用紙換算で30枚以上（12,000字以上）  
小研究（20枚以下）、研究余滴（10枚以下）、翻訳実践（自由）
- 2 原稿表記 原則として日本語表記・横書き
- 3 原稿締切 随時（応募希望者は、〈氏名・所属・仮題・簡単な原稿内容・パソコンのメールアドレス〉等を明記して、あらかじめ執筆意向を【[itokaken@gmail.com](mailto:itokaken@gmail.com)】まで連絡のこと）
- 4 電子公開 毎年春・秋（予定）
- 5 体裁 A5版の版面を想定したオンライン画面
- 6 推奨版面 ・活字11ポイント、27行×34字詰、余白上下左右20ミリ  
・フォントは、MS明朝、Times New Roman  
・節ごとに小見出しを付す。  
・注は版面ごとにそれぞれ下部にアンダーラインを引いて付す。  
注番号は本文の当該箇所にも丸括弧（ ）付きの数字で示す。  
（参考文献の書式例については、「海外源氏情報」内「海外平安文学研究ジャーナル」(<http://genjiito.org/journals/>) 参照のこと）
- 7 原稿入稿 ワード文書またはテキストファイルをメールに添付して送付。  
問い合わせ・送付先 【[itokaken@gmail.com](mailto:itokaken@gmail.com)】
- 8 採否/校正 採否はメールで連絡。執筆者の校正は初校のみ。ただし、公開から1年以内に1度だけ改訂版に差し替え可能。
- 9 図版・写真など 掲載許可が必要な場合、原則として資料手配や使用料は執筆者の負担。図版・写真は、原稿枚数の中に含む。

# 目次

あいさつ 伊藤 鉄也 3

原稿執筆要項 4

## ❁ 研究会拾遺

モンゴル語訳『源氏物語』について 伊藤 鉄也 11

(参考資料：各国語訳『源氏物語』翻訳時に省略された場面の一覧)

『源氏物語』末松英訳初版表紙のバリエーションについて  
ラリー・ウォーカー 42

《コラム》日本でも出版された末松謙澄訳『源氏物語』  
浅川 槿子 46

各国語訳『源氏物語』「桐壺」について 浅川 槿子 48

各国語訳「桐壺」(『源氏物語』『十帖源氏』) 翻訳データについての  
ディスカッション報告 (第6回研究会) 77

## ❁ 翻訳の現場から

『十帖源氏』の英訳の感想 ジョン・C・カーン 87

『十帖源氏』英訳所感 緑川 眞知子 89

『十帖源氏』スペイン語翻訳における文化的レファレンスの取り扱い  
猪瀬 博子 91

『十帖源氏』「桐壺」巻のウルドゥー語訳によせて 村上 明香 99

## ❁ 研究の最前線

スペインにおける平安文学事情 清水 憲男 105

新刊紹介：朴光華著『源氏物語—韓国語訳注—』（桐壺巻）

巖 教欽 109

## ❁ 付録

各国語訳『源氏物語』・『十帖源氏』「桐壺」翻訳データ 118

『源氏物語』「桐壺」スペイン語 121

イタリア語 151

『十帖源氏』「桐壺」スペイン語 163

イタリア語 178

[執筆者一覧](#) 187

[編集後記](#) 188

[研究組織](#) 189



物思ふにたら  
まふへくむ  
あらぬ身の  
袖うちふりし  
心しりきや

\*表紙・前扉・扉 人間文化研究機構・国文学研究資料館所蔵  
『源氏物語屏風』「紅葉賀」巻の色紙  
(金箔散下絵入の詞書、金泥彩色画／番号：ラ1ー18)



## 研究会拾遺





## モンゴル語訳『源氏物語』について

伊藤 鉄也  
(いとう てつや)

### ❁ はじめに

ジャルガルサイハン・オチルフー氏によるモンゴル語訳『源氏物語』において、翻訳されなかった場面と描写（刈り込みの手法）を確認し検討する。

以下で「刈り込み」と言うのは、物語本文の一部を省略して翻訳することを指すものとする。また、ここでは考察の対象を第1巻「桐壺」に限定していることも、あらかじめお断りしておく。

『源氏物語』の本文を刈り込むことについては、かつて「物語本文を刈り込むこと ―折口信夫の源氏物語観―」（『源氏物語受容論序説』伊藤鉄也、1990年、桜楓社）において、折口信夫における刈り込みの手法の実態を考究した。折口信夫は『新編源氏物語（上・下）』という企画（昭和4年頃のこと）を持っていた。しかし残念ながら、ついにその計画は未刊のままに終わったものである。当該論稿のまとめで、以下のように記した。

物語の本文を刈り込んでわかりやすい源氏物語にするという、一見、中世の梗概書、入門者用のダイジェスト版のように思われる『新編源氏物語』も、その発想の基盤には、折口独自の源氏物語観によって支えられたものであった。（311頁）

また、拙稿「末松謙澄が英訳源氏で刈り込んだもの―翻訳されなかった描写と脇役たち―」（『日本文学研究ジャーナル 第1号』伊井春樹編、2007年、国文学研究資料館）でも、翻訳において本文を刈り込むことに関して論じている。

本考察は、オチルフー氏がモンゴル語訳を通して、『源氏物語』の真髓をいかにモンゴル人に伝えようとしたのかを考えるものである。翻訳のもととなっている『源氏物語』は、原文ではなくて谷崎潤一郎の『新々訳源氏物語』である。忠実に訳出する中でも、場面によっては訳されていないところが散見するのである。

なお、本考察においては、オチルフー氏のモンゴル語訳を日本語に訳し戻した次の2種類の資料を活用した（所属及び翻訳文は依頼当時のまま）。これは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構のプロジェクト「文化の往還」と、科学研究費補助金基盤研究（A）「日本文学の国際的共同研究基盤の構築に関する調査研究」（平成21年度）の成果の一部をなすものである。

(1) ツムルバータル・ナルマンダハ

(立命館大学研究生、モンゴル語の母語話者)

(2) 青木隆紘（東京学芸大学大学院生、モンゴル語の研究者）

この訳し戻し翻訳の資料作成にあたっては、以下の留意点を明示して

日本語にするにあたり、滑らかな、練られた日本語である必要はありません。  
逐語訳といえますか、正確に日本語に移し替えたものがあるか、たいの  
です。  
私としては、今回のモンゴル語訳『源氏物語』で、そのベースとなった谷崎潤一郎訳『源氏物語』のどこが訳されなかったのか、また、どのような単語が別の言葉に置き換えられているのか、また、何が補足して訳されているのか、ということが知りたいのです。  
新年8日からは、翻訳なさった方（ジャルガルサイハン・オチルフーさん、モンゴルの大統領府の方で、大学の研究者ではないようです）に直接お目にかかり、省略と改変の背景をインタビューする予定です。そのため資料として、日本語に訳し戻したものがが必要です。

翻訳依頼をした。

以下で例示する〈小見出し〉は、伊藤が作成した72項目を活用して

いる。

全項目については、「「桐壺」巻の小見出し試案（72項目版）2014年3月26日」(<http://genjiito.blog.eonet.jp/default/2014/03/72-0b30.html>)を参照願いたい。

## ❁ 1 モンゴル語訳『源氏物語』の基本情報

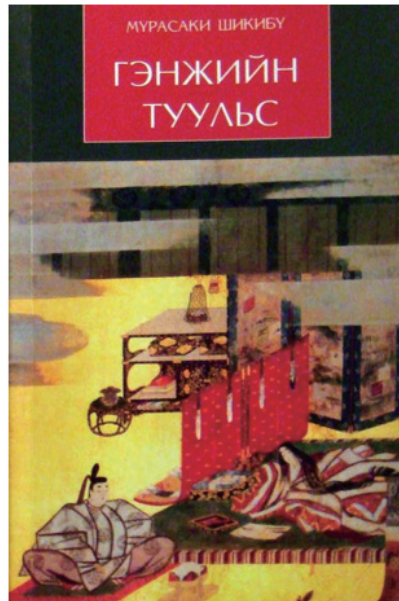
『源氏物語』のモンゴル語訳は、今のところ次の一例だけである。ただし、これは谷崎潤一郎の『新々訳 源氏物語』を元にしたものであり、古文（原文）からの訳はまだなされていない。

現在確認できるモンゴル語訳に関する書誌とその概要を整理しておく。

■ Murasaki Shikibu / Ochirkhuu JARGALSAIKHAN [1963-]  
Ulaanbaatar (ウランバートル) [モンゴル] : Monsudap  
2009. 254 p. 23 cm.

O c h i r k h u u  
JARGALSAIKHAN (オチル  
フー・ジャルガルサイハン)  
によるモンゴル語訳。

序文（7頁）は翻訳者自身による。『源氏物語』の成立、紫式部について、『源氏物語』の魅力について述べる。「世界で、叙情的な内容の物語形式の作品がほとんど出てきていない時代、30過ぎの、モンゴルのに言えば「一人身で一家（ゲル）の長になった」女性が世界で最初の物



語形式の作品、恋愛の叙情的な長編小説を書いた」と語る。さらに、Arthur WALEY の英訳を挙げて紹介する。アメリカの『Life』誌(1997年10月特別号)に、「この1000年に世界を変えた100の事件の83番目に、ムラサキ・シキブが『ゲンジ・モノガタリ』という世界初の長編小説を書いた」と掲載されていると記す。

翻訳には、谷崎潤一郎、与謝野晶子、瀬戸内寂聴らの現代語訳を参考にしたとある。亜細亜大学教授鯉淵信一が校閲している。最後に在モンゴル国日本特任全権大使、市橋康吉への謝辞がある。

本文は、「桐壺」～「末摘花」までを収録。「世界古典文学選集」50作品をモンゴル国大統領ナムバリーン・エンフバイヤルの大統領令により出版。現在、「紅葉賀」～「花散里」までを第2巻として出版予定(2010.2)。同年にコンパクト版も刊行されている。

翻訳者 JARGALSAIKHAN は、モンゴル生まれ。1998年に教育哲学で東京学芸大学にて修士取得。『源氏物語』の他には、司馬遼太郎『草原の記』(1997)・『20世紀に生きる君たちへ』(2001)・『ロシアについて』(2002)、福沢諭吉『学問のすすめ』(2004)、Samuel SMILES 著・中村正直(敬宇)訳『自助論』(2004)、夏目礎石『夢十夜』などをモンゴル語に多数翻訳している。

この情報が手元に集まるに当たっては、朝日新聞記者の白石明彦氏のご教示が始発点となっている。白石氏から亜細亜大学国際関係学部の鯉淵信一先生を紹介していただき、鯉淵先生のご好意により本書を入手した経緯がある。

また、本書の翻訳者であるジャルガルサイハン・オチルフー氏に会うべく、2010年1月初旬にモンゴルへ飛び、直接オチルフー氏から翻訳にあたっての情報やお話をうかがうことができた。

このことは、伊藤のブログサイト「鷺水亭より」から、[「モンゴル語訳『源氏物語』の話」\(2010年1月13日\)](http://genjiito.blog.eonet.jp/default/2010/01/post-9ad8.html) (<http://genjiito.blog.eonet.jp/default/2010/01/post-9ad8.html>) として公開している。その一部をここに引用し、翻訳の背景にあるものと異文化理解について考える一助とした

い。

■ 「モンゴル語訳『源氏物語』の話」(抄出)

モンゴル語訳の翻訳者であるジャルガルサイハンさんとの面談では、たくさんの情報がもらえました。2日間にわたり、たくさんのお話ことができました。

日本の古典文学との関わりがなかったこともあり、恩師の鯉淵信一先生(亜細亜大学)に相談され、谷崎潤一郎訳の『源氏物語』をもとにして翻訳することを決断されたのです。

昭和40年版の10巻本谷崎源氏を鯉淵先生が用意され、奥様がモンゴルに届けに来られたのです。

翻訳にあたっては、与謝野晶子と瀬戸内寂聴の源氏訳も、併せて確認しながらの作業です。

また、『源氏物語事典』(秋山虔・室伏信助編、角川書店)を参考にしながらの、未知の領域への挑戦が続いています。

そもそも『源氏物語』のことを初めて知ったのは、司馬遼太郎の「義務について」という一文からでした。アーサー・ウェイリーや紫式部のことに関連して、『源氏物語』に触れたものです。とにかく、難しいものだとの認識があったそうです。しかし、国の企画でもあり、さらには大統領からの指名ということで、荣誉ある仕事として取り組んでおられます。

モンゴルはアジアにあり、仏教と関わりの深い国なので、日本の『源氏物語』とのつながりが多いことを実感されてくれるそうです。

2009年に選ばれた、モンゴルで訳された世界文学作品の最高5作品は、次のものでした。

- (1) アイルランド「ウイリス」
- (2) 日本「源氏物語」
- (3) フランス語「酔っぱらっている船」
- (4) ロシア「詩 ESEININ」
- (5) ハンガリーの作品

ジャルガルサイハンさんの『源氏物語』が、第2番目に選ばれたのです。

翻訳にあたって、鯉淵先生からは原文が抜けていてもいいと言われているそうです。わかりにくいところは訳さなくてもいい、ということのようです。しかし、今は全部を訳したいと思うようになったそうです。

和歌の訳については、モンゴル詩の特徴である韻を踏んでいます。

ジャルガルサイハンさんの訳は、鯉淵先生と奥様に見てもらっておられます。1982年に国立モンゴル大学で日本語の勉強を始め、1985年に客員教授として来られた鯉淵先生に教わったときから、先生とのつながりができたのです。

しかし、モンゴルで日本の古典文学がわかる方はおられません。

『源氏物語』を訳していく上で、植物や衣服などについては、日本人との関心の違いから、いつも苦勞するとのことでした。

例えば、「桐」というものについて、ロシア語で「ウナギの～」とあることから、モンゴル語では「ウナギの腎臓の木」として訳したのだそうです。モンゴルの読者への理解を大切にしている翻訳です。

モンゴルでは、虫は人の悲しみを伝える時によく使うとか。人の心を表す意味で虫を使うようです。これは、詩においても同じです。

「桐壺」巻で、桐壺更衣亡き後の鞍負命婦の歌で、「鈴虫の声の限りをつくしても～」や「いとどしく虫の音しげき浅茅生の～」の和歌の部分に関して、時間を忘れて、しばらく意見交換をしました。

蓮についても、西の方にあると聞いている程度で、見たことはないそうです。仏教に関連する花なので、ご存知と思っていたので意外でした。

このようなことが、たくさんあるようです。異文化理解のすれ違い、とも言えそうです。

また、花について、モンゴルでは、日本のようにさまざまな名前をつけて区別してはいないのです。色で花を区別することが多いので、「菊」は「黄色い花」ということになります。



「夕顔」は「お月様の花」とするといわれると、その理由がわかりません。すると、夕顔は見たこともないので、辞書で調べると、夕方咲いて明け方に萎むことから、「お月様の花」と言うことにしたのだ、とか。

ロシア語とモンゴル語の辞典で調べ、その意味を考えることが多いそうです。ロシア語を調べ、国際的な名称を調べて訳文に活かすことにしておられるのです。

翻訳を通してわかる異文化理解は、さまざまな問題に気づかせてくれます。

## ❁ 2 嫉妬・怨恨・賛美に関する訳文

オチルフー氏のモンゴル語訳は、異文化交流の上でお互いの文化理解に関して貴重な情報を数多く齎してくれる。まずはその点の確認をしておきたい。

用例の引用にあたっては、〈小見出し〉〈谷崎『新々訳』〉〈モンゴル語訳（ナルマンダハ）〉〈モンゴル語訳（青木）〉の順に掲出する。その後■を付して私見を述べていく。

### 【事例1】

#### 〈小見出し〉

2 帝から寵愛される桐壺更衣は、周囲からの嫉妬が集中し病弱となる  
「朝夕の宮仕〜」（『源氏物語別本集成 続』0031 / 『源氏物語大成』  
五④ / 『新編日本古典文学全集』（小学館）一七）

#### 〈谷崎『新々訳』〉

そんなことから、朝夕の宮仕えにつけても、朋輩方の感情を一途に害したり、恨みを買ったりしましたのが積り積ったせいでしょうか、ひどく病身になって行って、何となく心細そうに、ともすると里へ退って暮すようになりましたが、帝はいよいよたまらなくいとしいものに思召

して、人の「非難」をもお構いにならず、世の語り草にもなりそうな扱いをなさいます。

#### 〈モンゴル語訳（ナルマンダハ）〉

あの女中は皇居のルールで朝から夕方まで一生懸命に働いているにもかかわらず、側室たちや女性たちの「悪魔の気持」がもっと増え、羨ましが  
る気持が溢れ、その「悪魔に襲われる」かのように病気になり、体が弱まっ  
て、実家に帰って日々を送るようになった。

王様はあの女性を可愛そうに思い、愛情がもっと溢れるばかりで、人々の「嫉妬」を全然気にしなかった。

#### 〈モンゴル語訳（青木）〉

その女中の女は宮殿の仕事で朝から夕べまで《アキレス腱をかがめるこ  
ともなく》働き続けたのに、后たちや女たちの「黒く悪い心」は増し続け、  
嫉妬は流れ出続け、「黒い毒を頭からかぶる」とはこのことか、まもなく  
病を得て、体は衰弱し続け実家で日がな過ごすようになった。

天皇は哀れな女を大変憐れみ、愛する気持ちはさらに高まる他なく、人々の  
《黒い舌と口（悪口）》をも全く気にしなかった。

■ 感情の表現の中でも、嫉妬や怨恨に関する部分について、モンゴル語訳では「悪魔」とか「黒い…」という言葉で語られているのが特徴的である。実際のモンゴル語訳がどのような語意を元にするものなのか、今私には不明ながら、この表現には異文化を共有する上での要素が内包する例となっているようである。

#### 【事例2】

##### 〈小見出し〉

5 美しい玉の男御子が誕生し、帝は第一皇子よりこの弟宮を寵愛する  
「前の世にも～」（0136 / 六① / 一八）

〈谷崎『新々訳』〉

帝は早くお会いになりたくて、待ちきれなくおなりなされて、急いで呼び寄せて御覧になりますと、珍しい御器量のお兄なのです。

〈モンゴル語訳（ナルマンダハ）〉

王様が皇子を早く見たくて、待ち待って、急いで皇居に呼び寄せたのを見れば、油ついている手で触れないぐらい可愛い顔をしているしている男の子だった。

〈モンゴル語訳（青木）〉

天皇は皇太子をとにかく早く見たいと、待ち、急ぎ、宮殿に呼んで来させ見ると、油のついた手では持てないほどはっきりとかわいい顔の容貌の男の子であった。

■ 光源氏の容貌が並々ではないことを言うのに、「油のついた手では触れない」という表現をしている。この背景には、油というものに対する異質な文化が横たわっているからだ、と言えよう。今後は、さらにこの文化事象の違いを掘り下げていくと、日本とモンゴルのかわいいものに対する物の見方や意識の違いが見えてきそうである。

### ❁ 3 刈り込まれた場面と描写

前節では、モンゴル語訳において異なる表現となっている箇所を2例だけとりあげて、文化理解の違いを知る手掛かりとなりそうな事例を見た。

以下では、オチルフー氏がモンゴル語に翻訳しなかった箇所を確認することで、伝え難かった内容や、不要と判断した内容などを検討したい。

モンゴル語訳を進めるにあたり、オチルフー氏は鯉淵先生から次のように言われていたことを、先年モンゴルでオチルフー氏から直接伺っている。

・翻訳にあたって、鯉淵先生からは原文が抜けていてもいいと言われていた。

- ・わかりにくいところは訳さなくてもいい。
- ・しかし、今は全部を訳したいと思うようになった。

このことを踏まえて、いくつかの翻訳を省略した、いわゆる刈り込まれた場面を確認しておきたい。

### 【事例3】

#### 〈小見出し〉

- 15 三歳の若宮は母君の死により、服喪のため宮中から里邸へ退出する 「御子は〜」(0644 / 九⑩ / 二四)
- 16 桐壺更衣の葬送は鳥辺野で行われ、母は娘と一緒にと泣き焦がれる 「限りあれば〜」(0684 / 一〇② / 二四)
- 17 気が動転している母は、火葬の現実も受け入れられず諦めきれない 「むなしき〜」(0712 / 一〇⑤ / 二四)
- 18 桐壺更衣に三位追贈の宣命がくだり、女御更衣たちは憎しみを増す 「内裏より御使〜」(0741 / 一〇⑧ / 二五)
- 19 聡明な女房たちは桐壺更衣の美質を追想し、思慕の情をもって偲ぶ 「もの思ひ知〜」(0775 / 一〇⑪ / 二五)
- 20 秋となり帝はただ涙の日々の中、弘徽殿女御は桐壺更衣を許さない 「はかなく〜」(0809 / 一一① / 二六)

#### 〈谷崎『新々訳』〉

<p>〈刈り込み対象箇所〉 それでも御子はそのままにお置きなされて、お顔を御覧になりたいのですが、かような折に内裏にとどまっていらっしゃる例がないので、これも里方へ御退出になります。侍う人々が泣き感うたり、帝が絶え間なく涙を流していらっしゃるのを、何事が起ったともお思いにならず、不思議そうに見廻しておいでになるのですが、普通にありふれた親子の別れでも悲しいものなのですから、まして今の場合の哀れさは、言ってみてもしようがありません。</p>
---

<p>ものには限りがありますから、普通の作法に従って葬ってお上げになるにつけても、母北の方は、自分も同じ煙になって空へ立ち昇ってしまう</p>
---

いたいと言って泣きこがれ、おん送りの女房の車を慕うてお乗りになつて、愛宕という所で、厳めしい儀式を執り行っている現場へお着きになりましたが、その時の心地はどんなでしたらうか。

「空しきおん骸を見ながらも、やっぱり生きていらっしゃるような気がしてなりませんから、灰におなりになるところを拝みましたら、もうこの世にいない人だと、ふつつり諦めがつくであろうと存じまして」と、けなげなことを言っておられたのですけれども、車から転び落ちんばかりに取り乱されるので、さればこそ、こうなることとっていたのにと、人々は手を焼くのでした。

内裏からは御使がありました。三位の位をお贈りになる由で、勅使が見えてその宣命を読み上げるのが、また悲しみを誘います。女御と呼ばれるようにもさせずにしまったことを、この上もなく残念に思し召されて、位を今一階だけでもと、昇せてお上げになるのでした。それにつけてもまたお憎みになる人々が多いのです。

さすがに物事を弁えている方々は、姿かたちなどがめでたかったこと、気立てが素直で、角が取れていて、憎めないところがあったことなどを、今こそ思い出すのです。体裁が悪いほどの御寵愛であったからこそ、そっけなく嫉んだりしたもの、そういっても人柄がやさしくて、心に情愛があったことを、お上付きの女官なども語り合うて恋慕しているのです。ほんに、「なくてぞ人は」とは、こういう折の心持でありましょう。

はかなく月日が過ぎて行きましたが、後々の御法事などにも、お里方へ御使を立ててねんごろにおとぶらいになります。ほど経るままに、やるせなく悲しくおなりなされて、おん方々の宿直なども、絶えて仰せつけられず、ただ涙に濡れて明かし暮していらっしゃいますので、その御様子を見る人々までが湿っぽい秋を味わうのでした。

#### <モンゴル語訳 (ナルマンダハ)>

愛する愛人を亡くした時から王様はそれと言うもない悲しみに負われ、側室や女中の誰でもを無視し、朝も晩も涙であふれていたからその秋に見た誰もが心が痛む。

### 〈モンゴル語訳（青木）〉

愛する人を失った時から、天皇は悲しみに包まれ、妃たち、女中たちの誰とも共にせず、朝な夕な目に一杯涙をため座っているようになったので、その秋になっても、誰もが心を痛めた。

■ ここでは、悲しみの場面の多くが省略されている。桐壺更衣の葬送と嘆き悲しむ母。そして周辺の人々の憎悪と称賛。さらには、桐壺帝が涙に暮れる日々を送ることも刈り込まれる。

愁嘆場と言える宮廷内での悲しみと憎しみが交錯する様は、モンゴル語には訳されていないのである。

### 【事例4】

#### 〈小見出し〉

- 22 帝は夕月夜の美しい折に催した管弦を思い出し、更衣の面影に浸る 「夕月夜の～」(0877 / 一一⑨ / 二六)
- 23 命婦は亡き更衣の邸に入り、八重葎で荒れた庭には月影が差し込む 「命婦かしこ～」(0907 / 一一⑫ / 二七)
- 24 更衣の母は命婦と対面し感極まり涙し、命婦は帝の仰せ言を伝える 「南面に～」(0937 / 一二② / 二七)
- 25 命婦は帝の心意を更衣の母に伝え、涙にむせぶ帝からの手紙を渡す 『しばしは～』(0987 / 一二⑦ / 二八)
- 26 帝からの文は、若宮と共に参内するようにと懇ろに促すものだった 「目も見え～」(1043 / 一二⑬ / 二八)
- 27 母君は桐壺更衣の入内のいきさつを語り、横死のようなさまを嘆く 「命長さの～」(1094 / 一三⑥ / 二九)
- 28 若宮が就寝した後、勅使役の命婦は役目を終えたために帰参を急ぐ 「宮は大殿籠～」(1149 / 一三⑫ / 三〇)
- 29 亡き更衣の母君は、横死した我が子への尽きせぬ思いを命婦に語る 「くれ惑ふ～」(1163 / 一三⑭ / 三〇)

〈谷崎『新々訳』〉

夕月夜の面白い宵のほどに出しておやりになりまして、御自分はそのまゝ物思いに耽っていらっしやいます。あゝ、ほんとうにこういう折には管絃の遊びなどを催したものであったのにと、そんな御追憶が浮かぶにつれて、琴などをも趣深く掻き鳴らし、ふと口ずさむ歌のことばにも、何か常人の及ばぬものを持っていたその人の面影の、つとおん身に添うて離れぬような気持がなさるのも、やはり「闇のうつつ」に劣る淡い幻なのでした。

命婦は御息所のお里に行き着いて、車を門のうちに引き入れるより早く、あたりのけはいのものあわれなのに打たれます。この家のあるじの母北の方は、やもめぐらしをしていますけれども、御息所一人を守り立てて行くためにここかしこへ手入れをして、どうやら見苦しくない程度に過しておられましたのが、子故の闇にかきくれて泣き沈んでいましたうちに、いつしか八重葎にも遮られずにさし込んでいます。

車を母屋の南面に請じ入れて、命婦をお下し申した母君は、とみにはものも言われません。「今まで生き残っておりますことがたいそう辛うございますのに、こういう御使が蓬の露を押し分けてお越し下されましたにつけましても、お恥かしゅう存ぜられまして」と言って、いかにも慄えられないようにお泣きになります。「せんだって典侍が参られました折、『まのあたりお目にかかっておりますと、何ともお傷わしく、心も肝も消え入るようじゃ覚まして』と奏上しておりましたが、なるほど、私のようなもの分らぬ人間でも、たまらない心地がいたします」と、命婦はそう言って、少し気を落ち着けてから、仰せ言をお伝え申し上げます。

「『あの当座はひたすら夢路を辿るようであつたけれども、ようよう心が鎮まって来ると、夢と思つたのが覚めるときもない真実と分つて、堪えがたい気がするのですが、どうしたら慰む術があるかを語り合う人もないにつけては、内々で内裏へ来て下さらぬか。〈刈り込み対象箇所〉若宮が、涙にとどされた家の中で、さも頼りなく過していることなども、心苦しゅう思われるから、早う連れて参られるように』などと、はかば

かしゅうも仰せきらず、涙にむせ返り給いながら、人が見たらばあまり弱々しいと思いはせぬかと、そんな御遠慮をもしていられしい御気色のもったいなさに、皆までもお聞き申し上げないような始末で出て参ったのでございます」と言って、おん文を差し上げます。

「悲しさに眼も見えませぬが、忝ない仰せ言を光として読ませていただきます」と言って、母君はそれをお読みになります。「時がたてば少しは紛れることもあろうかと思ひながら暮しているのに、月日がたつほどいよいよおびびがなくなるのは何としたことか。幼い人がどうしているかと案じながら、一緒に育てて行けなくなった心もとなさが、口惜しくてならないのですが、今となってはやはりわたしを亡き人の形見と思つて、若宮を連れて来て下さい」などと、こまやかに書いておありになるのでした。

〈刈り込み対象箇所〉

宮城野の露ふき結ぶ風のおとに

小萩がもとをおもひこそやれ

とさるのですけれども、しまいまではようお読みになれません。

「長生きをしておりますのはほんとうに辛いものだと、思い知りましただにつけましても、まだ存えているのかと『松の思はんことも恥かし』ゆうございますから、貴き百敷のあたりへお出入りいたしますことは、ましてなかなか憚り多く存じます。恐れ多いお言葉をたびたび承りながら、そういうわけで私はようお伺いいたしません。ただ、『若宮は何と思し召してか、内裏へ参られることばかりをお急ぎになっていられしいゅうございますので、それもお道理と、おいとおしゅう存じあげております』というようにでも、私が思っておりますことを内々で奏上して下さいませ。何分私は不吉な身の上でございますから、こういう所にいらっしやいますのも縁起が悪く、もったいなく存ぜられまして」とおっしゃいます。

若宮はもうお寝みになっていらっしやいます。



「お顔を拝まさせていただいて、おん有様などをも詳しく奏上いたしとうございますが、お持ちになっていらっしゃるしやいましょうし、夜が更けて参りますから」と、命婦は帰りを急ぎます。

「子を思う道にくれまどう心の闇の片端だけでも、お話し申し上げて胸を晴らしとうございますから、公の御使いでなしに、一度ゆっくりお越しなされて下さいませ。この年頃は嬉しいことや晴れがましい御用でお立ち寄りくださいましたのに、こういう悲しいおん消息の御使いとしてお眼にかかりますとは、返す返すもままならぬ命でございます。

#### 〈モンゴル語訳（ナルマンダハ）〉

こんな満月の夜、音楽が響くパーティーがあって、愛する彼女が皆の前に音楽を素晴らしく引いて、勇ましい詩は本当に贅沢だったと王様は過去を思い出してため息していた。

ユウゲイ・ミヨフさん亡くなった女中の実家に着いた。

〈ナシ〉

そして：“あの時からいつも夢ではないかと思いつつきた。でも今は落ち着いて、本当に訪れてきた悲しみ苦しみを感している。こんな時にどうすれば良いか相談する人も私にいない。人目をしのんででも皇居に上がればどうだあなた。

小さな皇子をもしばらく見てない。可愛そうな彼が別れの悲しみに沈んでいる人々に中にいるから大変だろう。彼を皇居に至急連れて来て会わせて、あなたも一緒に来てとの王様の言葉を伝え、王様の目がいつも涙でうるうるしているが他の人に見せないように努力していること話した。

〈ナシ〉

〈ナシ〉

#### 〈モンゴル語訳（青木）〉

このようなある満月の美しくある夜に、音楽の宴を開き、愛する彼の目の上で、驚くほど美しく楽器を奏で、旋律をつけて紡いだ詩は、しょうのないほど甘美であったことだなあ、と天皇は過ぎたことを思い出し、

ぼんやり座っていた。

ユーゲイ・ミヨーフ婦人は故人の家に行ったのだった。

〈ナシ〉

そうして、「あの時から後、時間がたち夢ではないのだなあ、と物思いを続けて今に至りました。でも今、とても静かになって、どうしようもなくなってきた嘆き悲しみを感じています。こんな時にどうするべきかを適切にアドバイスする人がうちにはいません。人の目を答えるようにもなった宮殿に来ていただければ、どうでしょうか。

小さな皇太子とも会わなくなって久しいです。哀れな彼は別離の苦しみに落ちた（ふける）人の間においては、大変でしょう？彼を宮殿に早急に連れてきて会わせてくれませんか、あなたも一緒に来てくれませんか？」と天皇のお言葉を伝えて天皇の目には一杯の涙があふれているけれど他人にはそれを見せないでいるよう大変こらえていることについて懐古した。

〈ナシ〉

〈ナシ〉

■ 桐壺帝が亡き更衣を偲ぶ場面の後、帝の使者として靱負命婦が亡き更衣の邸に行き、更衣の母と涙ながらに追想する。帝から若宮と参内するようにとの手紙もあった。母宮も横死した更衣を回想して嘆き悲しみ、尽きない哀惜の念が綿々と語られる。そうした場面の大半が刈り込まれ、「宮城野の～」という有名な和歌も訳されていない。

## 【事例5】

〈小見出し〉

- 48 博識の右大弁と高麗人が漢詩を作り交わし若宮も興深い詩句を作る「弁も、いと～」(2019 / 二〇⑬ / 四〇)
- 49 帝は若宮を臣籍降下させ朝廷の補佐役にと決めると学問に励ませる「帝、かしこき～」(2075 / 二一⑤ / 四〇)
- 50 帝は宿曜道の判断も参考に、若宮を皇位継承権のない源氏にと決

〈谷崎『新々訳』〉

〈刈り込み対象箇所〉 朝廷からもこの高麗人に多くのものを賜わります。帝はこのことを誰にもお漏らしになりませんけれども、春宮の祖父大臣などは、何ぞお考えがおありになるのではないかと、疑っておいでなものでした。

帝は深いお心がおありになって、日本流の人相を見させてごらんなされて、夙に心づいていらしゃった〈ママ〉ことがあればこそ、今までこの君を親王にもせず置かれたのですが、あの高麗の人相見はほんとうに偉い者であったと思ひ合わされるにつけても、外戚の後押しのない無品親王にしておいて、身の振り方に困るようなことにはさせたくない、自らの御代もいつまで続くやら定め難いことであるから、臣下に下して朝廷の補佐をさせた方が将来にも希望が持てると分別なすって、いよいよ道々の学問を習わせていらっしゃるのです。

際立って聡明なので、尋常人にするのは非常に惜しいのですけれども、親王になられたら世の疑いを受けそうな形勢ですし、宿曜の道に詳しい者に考えさせても、同じように申しますので、源氏にして上げることに決めておいでになるのでした。

〈モンゴル語訳 (ナルマンダハ)〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

〈モンゴル語訳 (青木)〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

■ 若宮が高麗の相人と漢詩を作り交わすことと、臣籍降下により政治の世界から若宮を遠ざける経緯などが刈り込まれる。

### 【事例6】

#### 〈小見出し〉

- 55 藤壺は皇女の身ゆえに誰に気兼ねもなく、帝の寵愛もしだいに移る 「これは人の～」(2295 / 二三② / 四三)
- 56 源氏の君は常に父帝の傍にいて、若く美しい藤壺の姿を透き見する 「源氏の君は～」(2327 / 二三⑤ / 四三)

#### 〈谷崎『新々訳』〉

この方は御身分が高いせいか、はたの気受けもよろしく、誰あって貶める者もおりませんので、何事も存分になすって御不満なことはありません。〈刈り込み対象箇所〉亡き御息所は、なかなか人がそうさせて上げ

なかったのに、あいにくと御寵愛の度が深かったのです。帝も、あの時分のことをお忘れになったのではありませんが、いつとはなしに御心が移って、この上もなく慰まれるようになって行きますのも、浮世の常というものでしょうか。

源氏の君は、帝のお側をお離れになりませんので、ましてしげしげとお召しに与るお方は、そうそうきまり悪がって隠れていらっしゃるわけにも行きません。いずれのおん方々も、自分が人に劣っているとお考えになりますでしょうか。皆とりどりにお綺麗なことですけれども、お年を召した方々の中に、一人だけたいそう若く美しい藤壺は、ひどくはにかんで、見られないようになさるのですが、源氏の君は自然隙見なさることもあります。

#### 〈モンゴル語訳 (ナルマンダハ)〉

位も上位なので、それでなのか他の側室は嫉妬することが出来ない。側室フジツボはとにかく自由であって、物不足になる苦難は味わなかった。

〈モンゴル語訳（青木）〉

位階もまた一つ上なのでそのせいであろうか他の妃たち女たちは憎しみ嫉妬を向けることができなかった。

フジツボ妃は何があっても気まぐれで、足りずぐずぐずするような苦しみは見られなかった。

- 帝の思いがしだいに藤壺へと移り、その藤壺を慕うようになる光源氏の様子も刈り込まれている。

【事例7】

〈小見出し〉

- 60 光源氏は十二歳で兄東宮に劣らぬ元服の儀式を帝の主導で執り行う 「この君の〜」(2483 / 二四⑤ / 四四)
- 61 清涼殿で左大臣が光源氏に冠を被せ、帝は更衣がいたらと感極まる 「おはします〜」(2537 / 二四⑩ / 四五)
- 62 加冠の儀の後、光源氏の拝舞にみなは感涙し帝も更衣を想い感無量 「かうぶり〜」(2580 / 二五① / 四五)

〈谷崎『新々訳』〉

〈刈り込み対象箇所〉 この君の童姿を変えてしまうのは残念にお思いになりましたが、十二歳で元服なさいます。自ら手を下して世話をお焼きになり、限りある儀式の上にさらに儀式をお加えになります。先年春宮の元服が、南殿において行われましたが、その時の騒ぎにも負けないようにお命じになります。ところどころの饗宴など、内蔵寮や穀倉院などが普通の公事として取り扱うと、とかく疎略になりがちであるからと、特別に仰せ下されて、結構づくめにおさせになります。

清涼殿の東の廂の間に、東向きに椅子を立てて、冠者の御座、加冠の大臣の御座をその前に設けます。申の時に源氏が席につかれます。髪をみずらに結うておられる容貌、顔の匂いなど、形をお変えになるのが惜しいようです。大蔵卿が御ぐし上げの役を勤めます。清らかなおん黒髪

の端を削ぐ時、いたいたしそうにしていますのを、帝は御覧になりまして、御息所がこれを見たらばとお思い出しなされて堪えがたい心地がなさいますのを、じっと我慢していらっしやいます。

加冠の儀が終って、御休息所に退出されて、装束をお替えになってから、階を下りて拝舞をなさる様子に、誰も涙を落します。帝はまして辛抱がおできならず、ものにまぎれて忘れていらっしやる折もあった昔のことを、また取り返して悲しく思い出されます。こんなに若くて元服をすると、見劣りするようなことがと案じていらっしやいましたのに、あきれるまでに美しさを増されました。

〈モンゴル語訳 (ナルマンダハ)〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

〈モンゴル語訳 (青木)〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

- 12歳になった光源氏の成人式にまつわることは訳されていない。物語の主人公の生長過程を詳細に語ることはないのである。

### 【事例8】

〈小見出し〉

- 64 祝宴で左大臣から娘葵の上との結婚を仄めかされ光源氏は恥じらう「さぶらひに〜」(2658 / 二五⑨ / 四六)
- 65 左大臣は帝から二人の結婚を催促されると返歌で応諾して拝舞する「御盃のついで〜」(2703 / 二五⑭ / 四七)
- 66 左大臣や親王たちは禄を賜い、この日の元服の儀式は春宮より盛

大 「左馬寮の～」(2730 / 二六④ / 四七)

〈谷崎『新々訳』〉

〈刈り込み対象箇所〉 人々が侍所に退出されて御酒宴が始まる時、源氏の君も親王たちの御座の末にお着きになりました。大臣はそつとそのことを匂わしてごらんになりましたが、まだ恥かしい年頃のことで、とかく返答もなさいません。内侍が宣旨を承り伝えて、大臣がお召しになりましたので、御前へ参られます。御禄のものを、お上付きの命婦が取次ぎをして下し賜われます。白い大袿に御衣一領は例の通りです。

おん盃のついでに、

いとけなき初元結に長き世を  
ちぎる心はむすびこめつや

これはお上がお心持を含めて御注意遊ばしたのです。

むすびつる心も深きもとゆひに  
こきむらさきの色しあせずば

と、左大臣は奏上して、長階から庭上に降りて舞踏されます。  
左馬寮のおん馬、蔵人所の鷹を据えて下されます。親王たちや上達部も階の下に並んで、それぞれの身分に応じた禄どもを賜われます。その日の御前の折櫃物、籠物などは、おん後見役の右大弁が承って調えたのでした。屯食や禄の唐櫃など、置き切れぬまでに飾り立てて、春宮の御元服の時よりも数が多いございました。どうしてなかなか盛大な御儀なのでした。

〈モンゴル語訳 (ナルマンダハ)〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

〈モンゴル語訳（青木）〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

■ 光源氏が葵の上を妻とすることや、元服の儀式が兄宮よりも盛大だったことなどは刈り込まれた。

### 【事例9】

〈小見出し〉

68 左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに「この大臣の〜」（2800 / 二六⑫ / 四八）

69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う「御子ども〜」（2833 / 二七① / 四八）

〈谷崎『新々訳』〉

〈刈り込み対象箇所〉 この大臣は帝のおん覚えもたいそうめでたい上に、北の方は帝と同じ后腹のお方ですから、どちらから見ても花やかな御身分なのに、今またこの君がこんな具合に婿におなりなさいましたので、春宮の御祖父として遂には天下の政を執り給うべき右大臣の勢いは、もの数でもなく気壓されてしまわれました。
---

多くのおん方々の腹に公達が大勢いらっしゃいます。宮のおん腹のお子は蔵人の少将で、たいそう若く綺麗でしたが、仲のよくない右大臣も、さすがにそれをお見逃しなさらなくて、可愛がっておられる四番目の姫君に配せられました。そして、こちらでも源氏の君に劣らずその少将を大切になさる御様子は、そうあって欲しい御両家のおん間柄なのでした。
---



〈モンゴル語訳（ナルマンダハ）〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

〈モンゴル語訳（青木）〉

〈ナシ〉

〈ナシ〉

- 光源氏の妻となった左大臣家が隆盛していくさまなど、政争にまつわることは刈り込まれている。

### 【事例 10】

〈小見出し〉

71 宮中での光源氏は藤壺の存在を慰めとし、左大臣家は温かく気遣う「大人になり〜」（2912 / 二七⑨ / 四九）

〈谷崎『新々訳』〉

〈刈り込み対象箇所〉でも、元服をなされてからは、帝も以前のように御簾の内へもお入れになりません。君はわずかに管弦のおん遊びのおりおりに、琴笛を合わせて音を通わせ、ほのかなお声の漏れて来るのに慰められて、内裏住みばかりを好ましく思っておられます。そして、五日六日も御前に侍うて、大殿の方へは二日か三日という風に、絶え絶えにお越しになるのですけれども、今は小さいお年ごろですから、お里方では何の罪もないことと、ねんごろにもてなしておられます。婿君の方にも、姫君の方にも、並々でない女房たちを、選りすぐって侍わせていらっしやいます。お気に入るような催しごとをなすったりして、精いっぱい御機嫌を取られます。
---

〈モンゴル語訳（ナルマンダハ）〉

〈ナシ〉

〈モンゴル語訳（青木）〉

〈ナシ〉

■光源氏が藤壺を慕うことを、具体的に語る場面は刈り込まれた。

❁ まとめ

ジャルガルサイハン・オチルフー氏が谷崎潤一郎の『新々訳源氏物語』をもとにしてモンゴル語訳をなすにあたり、刈り込まれた箇所<sup>1)</sup>の全用例とその確認は以上のとおりである。

これらを整理すると、以下のようになる。

[15～19]

桐壺更衣の死後と葬送、その母君の悲嘆、更衣への追贈、朋輩の憎悪と思慕

[22～29]

（要約）桐壺帝が更衣を回想、里邸の様子、母君と靱負命婦の対面と帝の意向の伝達。

（刈り込み）若宮のこと、母君が帝の親書を読む件りと帝の和歌、母君の帝への気持ち、靱負命婦の帰参

[48～50]

高麗の相人に対する帝の想いと、若宮を臣籍降下させて源氏にする決断。

[55～56]

帝の想いが更衣から藤壺に移っていくことと、光源氏が藤壺を透き見すること。

[60～72]

光源氏の元服。

※「63 左大臣は娘を春宮ではなく光源氏の元服の添い臥しに心積もりする「引き入れの～」(2623 / 二五⑥ / 四六)」は翻訳されて

いる。

葵の上との結婚にいたること。

※「67 元服した光源氏は左大臣邸に迎えられ、娘の葵の上と初々しく結婚「その夜〜」(2768 / 二六⑧ / 四七)」は翻訳されている。

左大臣家の隆盛

※「70 光源氏は藤壺を理想の女性として慕って想い悩み、葵の上とは疎遠「源氏の君は〜」(2863 / 二七④ / 四九)」は翻訳されている。

光源氏が会えなくなった藤壺を思慕することと、葵の上に通わなくなること。

※巻末部の「72 後の二条院を修築し、そこで理想の女性と暮らしたいと望む光源氏「内裏には〜」(2976 / 二七⑭ / 五〇)」は翻訳されている。

モンゴルの読者に対して、翻訳者であるオチルフー氏が伝える必要がないと判断した箇所は以上の事例である。このことから、文化の違いから生まれた移し替えの対象とされなかった場面や事象が確認できた。

今回は「桐壺」巻の例だけである。これを他の巻でも実施することにより、多面的な異文化理解の手掛かりが揃めることであろう。

さらには、モンゴル語訳の事例から他国語翻訳との比較に調査研究対象を広げることより、地域間の異文化交流と文化の共有のヒントが明確になるはずである。

## 追記

本考察のための資料整理にあたっては、浅川槇子さん（国文学研究資料館プロジェクト研究員）の協力を得た。

(国文学研究資料館・総合研究大学院大学 教授)

小見出し	谷崎源氏	モンゴル語訳		備考
		ナルマンダハさん	青木さん	
1 「いづれの御時～」	○	○	○	
2 「朝夕の宮仕～」	○	△	△	刈り込み事例 1
3 「唐土にも～」	○	○	○	
4 「父の大納言～」	○	○	○	
5 「前の世にも～」	○	△	△	刈り込み事例 2
6 「はじめより～」	○	○	○	
7 「人より先に～」	○	○	○	
8 「御局は桐壺～」	○	○	○	
9 「ことにふれ～」	○	○	○	
10 「この御子三つ～」	○	○	○	
11 「その年の夏～」	○	○	○	
12 「限りあれば～」	○	○	○	
13 「輦車の宣旨～」	○	○	○	
14 「御胸つと～」	○	○	○	
15 「御子は～」	○	×	×	刈り込み事例 3
16 「限りあれば～」	○	×	×	刈り込み事例 3
17 「むなしき～」	○	×	×	刈り込み事例 3
18 「内裏より御使～」	○	×	×	刈り込み事例 3
19 「もの思ひ知～」	○	×	×	刈り込み事例 3
20 「はかなく～」	○	△	△	刈り込み事例 3
21 「一の宮を～」	○	○	○	
22 「夕月夜の～」	○	△	△	刈り込み事例 4
23 「命婦かして～」	○	△	△	刈り込み事例 4
24 「南面に～」	○	×	×	刈り込み事例 4
25 「しばしは～」	○	△	△	刈り込み事例 4
26 「目も見え～」	○	△	△	刈り込み事例 4
27 「命長さの～」	○	×	×	刈り込み事例 4
28 「宮は大殿籠～」	○	×	×	刈り込み事例 4
29 「くれ惑ふ～」	○	△	△	刈り込み事例 4
30 「上もしか～」	○	○	○	
31 「月は入り方～」	○	○	○	
32 「をかしき御贈～」	○	○	○	
33 「若き人々～」	○	○	○	
34 「命婦は～」	○	○	○	
35 「いと細やか～」	○	○	○	
36 「いとかうしも～」	○	○	○	
37 「かくても～」	○	○	○	
38 「絵に描ける～」	○	○	○	
39 「風の音～」	○	○	○	
40 「月も入りぬ～」	○	○	○	
41 「朝に起き～」	○	○	○	
42 「さるべき契～」	○	○	○	
43 「月日経て～」	○	○	○	
44 「かの御祖母～」	○	○	○	
45 「今は内裏に～」	○	○	○	
46 「女御子たち～」	○	○	○	

小見出し	谷崎源氏	モンゴル語訳		備考
		ナルマンダハさん	青木さん	
47 「そのころ～」	○	○	○	
48 「弁も、いと～」	○	△	△	刈り込み事例 5
49 「帝、かしこき～」	○	×	×	刈り込み事例 5
50 「際ことに～」	○	×	×	刈り込み事例 5
51 「年月にそへ～」	○	○	○	
52 「母后世になく～」	○	○	○	
53 「母后、「あな～」	○	○	○	
54 「さぶらふ人々～」	○	○	○	
55 「これは人の～」	○	△	△	刈り込み事例 6
56 「源氏の君は～」	○	×	×	刈り込み事例 6
57 「母御息所も～」	○	○	○	
58 「上も、限りなき～」	○	○	○	
59 「こよなう～」	○	○	○	
60 「この君の～」	○	×	×	刈り込み事例 7
61 「おはします～」	○	×	×	刈り込み事例 7
62 「かうぶり～」	○	×	×	刈り込み事例 7
63 「引き入れの～」	○	○	○	
64 「さぶらひに～」	○	×	×	刈り込み事例 8
65 「御盃のついで～」	○	×	×	刈り込み事例 8
66 「左馬寮の～」	○	×	×	刈り込み事例 8
67 「その夜～」	○	○	○	
68 「この大臣の～」	○	×	×	刈り込み事例 9
69 「御子ども～」	○	×	×	刈り込み事例 9
70 「源氏の君は～」	○	○	○	
71 「大人になり～」	○	×	×	刈り込み事例 10
72 「内裏には～」	○	○	○	

○：完全に訳されている箇所

△：底本にある場面がまったく訳されていないわけではないが、一部刈り込みがある場面

×：底本にある場面を訳していない場合

備考：本稿であげられた刈り込み事例

参考資料：各国語訳『源氏物語』 翻訳時に省略された場面の一覧

以下の表は、英語・スペイン語・イタリア語に翻訳された『源氏物語』「桐壺」巻について、翻訳の訳し戻し本文を分類した結果である。「桐壺」巻の場面を72個に分けた、伊藤鉄也作成（2014年3月）の小見出しにあわせている。表の上から右に向かって、『源氏物語』を翻訳した翻訳者名、用いた底本を表示した。例として、各小見出しに該当する場面が翻訳されている本は○、該当する場面が翻訳されていない本文は×としている。以下に各言語ごとの結果を表示する。

訳者	英語		スペイン語					イタリア語	
	ウェイリー	タイラー	Gutierrez	Roca-Ferrer	Jordi Fibla	下野先生、ピント先生	アリエルさん	Orsi	Motti
底本	原典	原典	ウェイリー	不明	タイラー	旧全集	陣野先生	旧全集、新大系	ウェイリー
1	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17	○	○	○	○	○	○	○	○	○
18	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19	○	○	○	○	○	○	○	○	○
20	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21	○	○	○	○	○	○	○	○	○
22	○	○	○	○	○	○	○	○	○
23	○	○	○	○	○	○	○	○	○
24	○	○	○	○	○	○	○	○	○
25	○	○	○	○	○	○	○	○	○
26	○	○	○	○	○	○	○	○	○
27	○	○	○	○	○	○	○	○	○
28	○	○	○	○	○	○	○	○	○

訳者	英語		スペイン語					イタリア語	
	ウェイリー	タイラー	Gutierrez	Roca-Ferrer	Jordi Fibla	下野先生、ピント先生	アリエルさん	Orsi	Motti
底本	原典	原典	ウェイリー	不明	タイラー	旧全集	陣野先生	旧全集、新大系	ウェイリー
29	○	○	○	○	○	○	○	○	○
30	○	○	○	○	○	○	○	○	○
31	○	○	○	×	○	○	○	○	○
32	○	○	○	○	○	○	○	○	○
33	○	○	○	○	○	○	○	○	○
35	○	○	○	38と順序逆	○	○	○	○	○
36	○	○	○	○	○	○	○	○	○
37	○	○	○	○	○	○	○	○	○
38	○	○	○	○	○	○	○	○	○
39	○	○	○	35と順序逆	○	○	○	○	○
40	○	○	○	○	○	○	○	○	○
41	○	○	○	○	○	○	○	○	○
42	○	○	○	○	○	○	○	○	○
43	○	○	○	○	○	○	○	○	○
44	○	○	○	○	○	○	○	○	○
46	○	○	○	○	○	○	○	○	○
47	○	○	○	○	○	○	○	○	○
48	○	○	○	○	○	○	○	○	○
49	○	○	○	○	○	○	○	○	○
50	○	○	○	○	○	○	○	○	○
51	○	○	○	○	○	○	○	○	○
52	○	○	○	○	○	○	○	○	○
53	○	○	○	○	○	○	○	○	○
54	○	○	○	○	○	○	○	○	○
55	○	○	○	○	○	○	○	○	○
56	○	○	○	○	○	○	○	○	○
57	○	○	○	○	○	○	○	○	○
58	○	○	○	72の一部が挿入*	○	○	○	○	○
60	○	○	○	○	○	○	○	○	○
61	○	○	○	○	○	○	○	○	○
62	○	○	○	○	○	○	○	○	○
63	○	○	○	○	○	○	○	○	○
64	○	○	○	○	○	○	○	○	○
65	○	○	○	○	○	○	○	○	○
66	○	○	○	○	○	○	○	○	○
67	○	○	○	○	○	○	○	○	○
68	×	○	×	○	○	○	○	○	×
69	×	○	×	○	○	○	○	○	×
70	○	○	○	○	○	○	○	○	○
71	○	○	○	○	○	○	○	○	○
72	○	○	○	一部58へ	○	○	○	○	○

●英語

ウェーリー訳（底本は原典）

- (1) 小見出し 68 左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに「この大臣の～」がない。
- (2) 小見出し 69 左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う「御子ども～」がない。

●スペイン語

Gutierrez 訳（底本はウェーリー訳）

- (1) 小見出し 68 「左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに／（本文）この大臣の～」がない。
- (2) 小見出し 69 「左大臣家の蔵人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う／（本文）御子ども～」がない。

Roca-Ferrer 訳（底本は不明）

- (1) 小見出し 31 「月が沈む頃、命婦の歌を受け祖母君は惜別の情を車中の命婦に伝える／（本文）月は入り方～」がない。
- (2) 小見出し 35 「帝は里邸の様子を命婦から聞き、とり乱した祖母君の返書に心を遣う／（本文）いと細やか～」と小見出し 38 「帝は玄宗と楊貴妃の物語から、更衣との尽きぬ愛情を恨めしく思う／（本文）絵に描ける～」の順序が逆である。
- (3) 小見出し 58 「帝は藤壺と源氏を愛し、更衣の形代である藤壺に源氏は好意を示す／（本文）上も、限りなき～」に小見出し 72 「後の二条院を修築し、そこで理想の女性と暮らしたいと望む光源氏／（本文）「内裏には～」の一部が挿入。具体的には「光る君」という通称は高麗の人相学者がつけたという話（『光り輝く』の別称、）が挿入されている。



●イタリア語

Motti 訳（底本はウェーリー訳）

（1）小見出し 68 「左大臣は帝の信頼に加えて光源氏まで加わり右大臣家を凌ぐ勢いに／（本文）この大臣の～」がない。

（2）小見出し 69 「左大臣家の藏人少将は右大臣家の四の君と政略結婚して牽制し合う／（本文）御子ども～」がない。

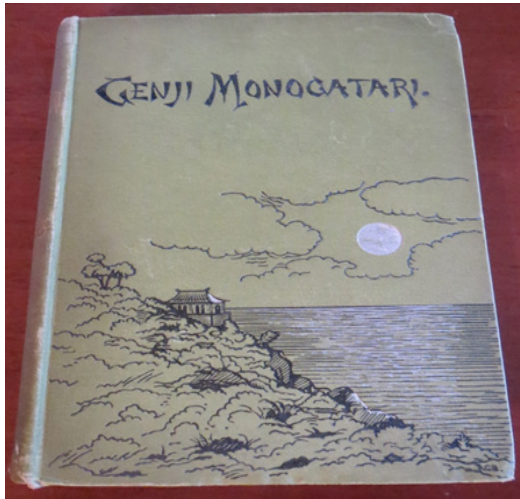
（国文学研究資料館・研究員 浅川槇子）

## 『源氏物語』末松英訳初版表紙のバリエーションについて

ラリー・ウォーカー

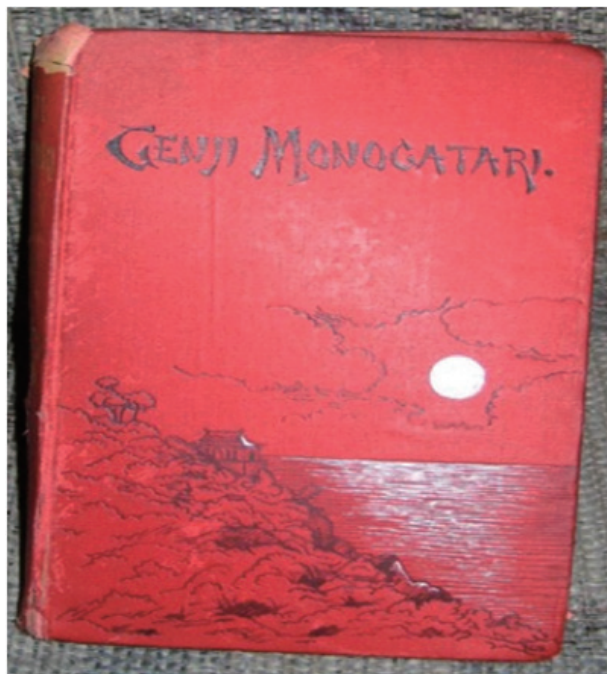
1882年に『源氏物語』最初の英訳が英国の Trübner 社により出版された。翻訳家の末松謙澄は当時イギリスに留学していた。末松は英語が雄弁で、ケンブリッジ大学の法律学部を卒業した。末松の英訳は17章まで、全54章の約三分の一を訳したが、近年の研究によると、登場人物を落とすことやこの英訳の政治的な動機、日本で源氏物語と紫式部のとらえ方などが集中的に多くなっている (e.g. Clements, Emmerich, 伊藤)。末松英訳は数回にわたって重版されているが、ケンブリッジ大学の Clements 氏によると初版の数はおよそ320冊であった。そのうち現在世界中100冊未満しか残されておらず、主にヨーロッパの図書館に保管されている。驚いたことに、この初版の表紙には三つのバリエーションがあると分かった。

双方とも内容は同じだが、下記のように相違は明快である。



上記は今までに知られた色彩および図様である。

下記は赤と銀で彩色の初版本である。



色の違いの理由などはまだ不明である。Amazon.com より入手、US \$2,500.00 (約 30 万円) で掲載されていた (2015 年 9 月現在当該図書はなし / 編集注)。本研究会の連携研究者・清水婦久子教授が赤と銀で彩色の初版本一冊を持つということで、Trübner 社は少なくとも 1882 年に表紙の二種類を出版した。

三つ目は上記の二冊と内容は完全に同じが、再製本した初版本とみられる。



古い本の修理はそんなに珍しくないことだが、銀色の文字は目立つ。これからも内容の受容性などはもちろんだが、それと共に出版状況の謎が残っている。

## 参考文献

Clements, Rebekah, "Suematsu Kencho and the first English translation of Genji Monogatari: translation, tactics, and the women's question." *Japan Forum*. vol.23(1), 25-47. 2011.

Emmerich, Michael. *The Tale of Genji: Translation, Canonization, and World Literature*. New York: Columbia University Press. 2013.

伊藤鉄也、香村悦子「末松謙澄が英訳源氏で切り込んだもの」(伊井春樹編『日本文学研究ジャーナル』第一号、2007、126-147)

Murasaki, Shikibu. *Genji Monogatari : The Most Celebrated of the Classical Japanese Romances*. Trans. Kenchio Suyematz. London: Trübner, 1882.

(京都府立大学 准教授)

## 日本でも出版された末松謙澄訳『源氏物語』

ここで、日本で出版された末松謙澄訳の『源氏物語』について簡単に補足したい。

沼澤龍雄著『日本文学史表覧』の「外国語譯國文學年表」<sup>1</sup>によると、明治14(1882)年に丸善商社から出版されたとなっている。しかし現状では、明治14(1882)年に日本で出版された本は確認できていない。明治27(1894)年に「丸屋商社」から出版された第2版にあたる本が、国内で確認できる最古の本である。しかし、丸屋商社は丸善のHP<sup>2</sup>によると、明治13(1881)年に「責任有限丸善商社」に改組されているため、明治14(1882)年に「丸屋」は存在しないことになる。

なお、末松訳の初版本については、『愛書家』第7号<sup>3</sup>に「英文 源氏物語 一八八一年 末松謙澄 洋一 八・〇〇」との情報が掲載されている。出版社は不明である。『海外における源氏物語』<sup>4</sup>ではこのことを受けて、「但し出版年はその前年とする説もある」と解説している。

(タイトル) GENJI MONOGATARI  
(出版社) Z.P MARUYA & Co. (丸屋商社)  
(刊行年) 明治27(1894)年  
(版について) 初版は明治14(1882)年  
(翻訳範囲) 「桐壺」～「絵合」

---

1 沼澤龍雄著『日本文学史表覧』p.182(明治書院、1934年)

2 丸善「沿革 明治」[http://www.maruzen.co.jp/corp/history/h\\_meiji.html](http://www.maruzen.co.jp/corp/history/h_meiji.html)  
(2015年9月8日閲覧)

3 「千代田図書館蔵古書目録の中の英訳『源氏物語』(1)」(鷺水亭より2011年7月22日、<http://genjiito.blog.eonet.jp/default/2011/07/post-cb68.html>、2015年9月8日閲覧)なお『愛書家』第7号は朝倉書店から1931年3月に出版されたものである。

4 大内英範「1 GENJI MONOGATARI」(伊藤鉄也編『海外における源氏物語』p.7～8、国文学研究資料館、2003年)



(本科研研究代表者：伊藤鉄也所有)

この本は「英文日本文庫」シリーズの2巻目として出版された。表紙は、赤地に金色で源氏香の図が描かれている。表表紙は、「花散里」・「須磨」・「常夏」、裏表紙は「花散里」である。その上に薄い紙のカバーがかかっている。扉を見てみると、「日本文庫の中 源氏物語」の文字と琴の絵が描かれている。その上部には、東條操氏の蔵書印が押されている。扉の次には、「JUSAMMI TOKOOGAWA (従三位徳川)」こと徳川家達からの謝辞が掲載されている。また、この本は奥付が切り取られており、右側のページは上から順に以下の書き込みが確認できる。

「英文学 神田早川町 三省堂／四書」

「(すり消しのため判読不能) CY 生」

そして同じページの左下には、

「昭和十九年春 東條操先生茅ヶ崎へ疎開さるその折御蔵書整理され記念として賜わる 三谷栄一 扉の蔵書印は先生の新しい印にして本書に始めて〈ママ〉使用されたといふ」

という三谷栄一氏のメモが記されている。

(国文学研究資料館 研究員 浅川槇子)

# 各国語訳『源氏物語』「桐壺」について

浅川 槇子  
(あさかわ まきこ)

## 🌸 はじめに

本科研の課題のひとつ「1. 翻訳から見た日本文化の変容」は、世界各国 32 言語（2015 年 8 月現在）で翻訳された『源氏物語』の総合的調査を実施し、受容・研究史を整理することである。具体的には 2013 年度から、各国語で翻訳された『源氏物語』の日本語への訳し戻しと、翻訳情報の整理として「『源氏物語』翻訳史」の公開を行っている。

『源氏物語』を外国語に翻訳する場合、Arthur Waley（アーサー・ウェイリー）など英訳された書籍からの重訳が多い。しかし、今回とりあげるスペイン語訳とイタリア語訳『源氏物語』には、直接、『源氏物語』の本文および現代語訳から翻訳をされたものがある。それらについて見ていきたい。

## 🌸 1 書誌について

今回とりあげるスペイン語、イタリア語に翻訳された『源氏物語』の書誌について以下にあげる。なお、スペイン語訳『源氏物語』書誌に関する詳細なデータは、『海外平安文学研究ジャーナル 2.0』<sup>1</sup>（本科研 HP よりダウンロード）を参照されたい。

### ◎スペイン語訳『源氏物語』

(1) Fernando Gutiérrez (フェルナンド・グティエレス) 訳	
書名	Genji Monogatari (Romance de Genji)
出版社	Palma de Mallorca
刊行年月日	2004 年

1 拙稿「スペイン語訳『源氏物語』の書誌について」(『海外平安文学研究ジャーナル 2.0』2015 年 3 月)



「桐壺」の章名	KIRITSUBO
底 本	Arthur Waley, The tale of Genji, G. Allen & Unwin, 1925 ~ 1933 YAMATA KIKOU (山田菊), LE ROMAN DE GENJI, Flon, 1928 にも影響を受けた。
翻訳の範囲	底本にならない「葵」の巻までの訳である。
翻訳の特徴	底本に忠実である。主語がない箇所は、主語を補っている。
(2) Xavier Roca-Ferrer (ハビエル・ロカ・フェレール) 訳	
書 名	La novela de Genji
出版社	Destino
刊行年月日	2005 年
「桐壺」の章名	Kiritsubo
底 本	不明
翻訳の特徴	複数の言語の翻訳が混合して利用されている。また、段落の順番なども翻訳者が自由に変更している。
(3) Jordi Fibla (ホルディ・フィブラ) 訳	
書 名	LA HISTORIA DE GENJI
出版社	ATARANTA
刊行年月日	2006 年
「桐壺」の章名	Kiritsubo (El pabellón de la paulonia 桐のパビリオン)
底 本	Royall Tyler, The Tale of Genji, Viking, 2001
翻訳の範囲	完訳
翻訳の特徴	主語がない箇所は、主語を補っている。
(4) (5) HIROKO IZUMI SIMONO (ヒロコ・イズミ・シモノ)・IVAN AUGUSTO PINTO ROMAN (イヴァン・アウグスト・ピント・ロマン) 訳	
書 名	EL RELATO DE GENJI
出版社	ペルー日系人協会 (APJ)
刊行年月日	2013 年
「桐壺」の章名	Kiritsubo (La cámara de la paulonia 桐の部屋)
底 本	『日本古典文学全集 源氏物語』(小学館、1973 年) と複数の翻訳書
翻訳の範囲	第 1 巻は「篝火」の巻までの翻訳である。
備 考	※この本の翻訳は、(4) 非母語話者と (5) 母語話者の 2 種類を掲載した。

## 【書籍として刊行されていないもの】

(6) Ariel Stilerman (アリエル・スティラーマン) 訳	
書名	スペイン語新訳『源氏物語』
翻訳を公開している URL	<a href="http://genjienespanol.files.wordpress.com/2013/08/el-patio-de-las-paulonias-kiritsubo.pdf">http://genjienespanol.files.wordpress.com/2013/08/el-patio-de-las-paulonias-kiritsubo.pdf</a>
刊行年月日	2013 年
「桐壺」の章名	桐の中庭
底本	早稲田大学教授 陣野英則先生編集の本文
翻訳の特徴	<p>           &lt;1&gt; 古典の原文をできるだけ忠実に翻訳した。            &lt;2&gt; 原文になく、翻訳者が補足をした箇所は灰色で示した。            &lt;3&gt; 原文における一文が長くても、スペイン語で複数に分けて翻訳することを避けた。            &lt;4&gt; 原文で同じ表現が登場したときは、スペイン語もそれに合わせて翻訳した。            &lt;5&gt; 物語作品が女房によって朗読された可能性を考えて、朗読に適した文体等に調整した。            &lt;6&gt; 主語が置かれていない文章は、そのまま翻訳した。            &lt;7&gt; 動詞や形容詞の活用形により、主語を推測できるように工夫した。主語を補う必要がある場合は、その箇所を灰色で示した。            (以上氏の HP による)  <a href="http://genjienespanol.wordpress.com/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E/">http://genjienespanol.wordpress.com/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E/</a> </p>

## ◎イタリア語訳『源氏物語』

(1) Adriana Motti (アドリアナ・モッティ) 訳	
書名	Storia di Genji il principe splendente
出版社	Einaudi
刊行年月日	初版は 1957 年、その後 1992 年・2006 年に再版された。
「桐壺」の章名	Kiritsubo
底本	Arthur Waley, The tale of Genji, G. Allen & Unwin, 1925 ~ 1933。
翻訳の範囲	底本にならい、「鈴虫」の巻を除いた翻訳となっている。
備考	序文はナポリ大学の教授 Giorgio Amitrano (ジオルジュ・アミトラノ) による。
(2) Maria Teresa Orsi (マリア=テレーザ・オルシ) 訳	
書名	La Storia di Genji
出版社	Einaudi
刊行年月日	2012 年
「桐壺」の章名	Il Padiglione della Paulonia
底本	日本古典文学全集 源氏物語 1～6』(小学館、1994 年～1998 年) 『新日本古典文学大系 源氏物語 1～5』(岩波書店、1999 年)
参考文献	『源氏物語の鑑賞と基礎知識 全 43 巻』(至文堂、1998～2006 年)
翻訳の範囲	完訳

## ❁ 2 原文・底本との比較

### [1] 方法

以下の7項目について、スペイン語については6種類、イタリア語は2種類の翻訳を比較した。項目については、国文学研究資料館編『源氏物語 千年のかがやき』（思文閣出版、2008年）のうち、「国文学研究資料館蔵『源氏物語団扇画帖』事物索引」（156～167頁）を参照した。

- (1) 人物（官職・位階・立場）に関する語
- (2) 儀礼・行動に関する語
- (3) 場所（役所・国も含む）・家屋に関する語
- (4) 調度・乗り物・色などに関する語
- (5) 動物（昆虫を含む）に関する語
- (6) 植物に関する語
- (7) 気象・時間・空間に関する語

以上の項目に基づいて抽出した語が、スペイン語およびイタリア語によりどのように翻訳されているかについて調べた。その過程で参考にした資料をあげておく。

《語の意味》・・・中村幸彦、阪倉篤義、岡見正雄編『角川古語大辞典』

第2巻～第5巻（角川書店、1982～1999年）を引用して作成した。

本文をそのまま引用した場合のみ、ページを付す。

【原文】・・・伊藤鉄也作成の池田本『源氏物語』の校訂本文をさす。

【現代語訳】・・・稿者が池田本を現代語に訳したものをさす。

スペイン語 Gutiérrez 訳およびイタリア語 Motti 訳の項目においての〈底本訳〉→佐復秀樹『源氏物語ウェイリー版1』（平凡社、2008年9月）を使用した。

スペイン語 Fibla 訳においての〈底本訳〉→Royall Tyler 訳を発表者が日本語に直訳したものをを使用した。

イタリア語 Orsi 訳においての〈底本 1〉→『日本古典文学全集 源氏物語 1～6』（小学館、1994年～1998年）

イタリア語 Orsi 訳においての〈底本 2〉→『新日本古典文学大系 源氏物語 1～5』（岩波書店、1999年）

## [2] 語の抽出と原文・底本との比較

上記にあげた 7 項目について、1 項目に一語ずつ対象となる語をあげる。なお、翻訳の訳し戻し担当者の情報を以下にあげておく。翻訳者の属性に関して記載が無い場合は、非母語話者をさす。

・非母語話者→日本在住の日本人。大学・大学院でスペイン語を専攻し、現在は通訳案内士。

・母語話者→本科研の研究協力者で日本在住のスペイン人。大学・大学院で平安文学を専攻し、日本の大学で客員研究員をつとめる。

### (1) 人物（官職・位階・立場）に関する語

「御息所」

文脈上、「御息所」は桐壺更衣をさす。各国語の訳を見てみると、具体的には〔1〕貴婦人・女性という立場・属性に関連する訳、〔2〕避難場所・安らぎの貴婦人という訳、〔3〕桐壺更衣・桐の部屋の貴婦人という特定の人物をさす訳の 3 種類の訳があることがわかる。以下、翻訳本文と底本を比較しながら見ていきたい。

《語の意味》「みやすみどころ（御休所）」から転じた語。天皇や東宮などの妻を間接的に指す語。（5-p.541）

【原文】その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。

【現代語訳】その年の夏、若宮の母である御息所は、ちょっとした病をわづらわれて、宮中を退出しようとなさるのを、（帝は）彼女がお暇を頂くのを許されなかった。

◎スペイン語訳

① Gutiérrez 訳	
本文	Durante el verano de aquel año, <u>Dama</u> se sintió enferma.Repetidas veces solicitó autorización para regresar a su casa, autorización que no le fue concedida. (p.14)
訳し戻し	その年の夏の間に、 <u>貴婦人</u> は病を感じた。繰り返し何度も家に帰る許可を懇願したが、許可は彼女には与えられないものであった。
底本	In the summer of that year <u>the lady</u> became very downcast. She repeatedly asked for leave to go to her home,but it was not granted. (p.9)
底本訳	その年の夏に、この女性はたいへん気分がすぐれなくなった。くりかえし里に行く許可を求めたが許されない。(p.19)
② Roca-Ferrer 訳	
本文	A principios de verano <u>Kiritsubo</u> pidió licencia para marchar a su casa porque,decía,su salud era mala,pero el emperador se resistía a separarse de ella. (p.86)
訳し戻し	夏の初めにキリツボは家に行くための許可を求めた。なぜなら、言うには彼女の健康状態が悪かったからだ。しかし皇帝は彼女と離れることを拒んだ。
③ Fibla 訳	
本文	Durante el verano de aquel año,el <u>Refugio</u> de Su Majested enfermó,pero él no le permitió que se retirase. (p.39)
訳し戻し	その年の夏の間に陛下の <u>避難場所</u> となっていた人は病気になったが、彼は彼女が退出することを許さなかった。
底本	In the summer of that year,His Majesty' <u>Haven</u> became unwell,but he refused her leave to withdraw. (p.4)
底本訳	その年の夏、帝の <u>避難場所</u> （という呼び名を持っていた人）は病気になったが、彼は彼女が退出することを許さなかった。
備考	「Haven」は避難場所をさすちなみに底本の「Haven」には、「7.Genji's mother. Her unofficial title (Haven,Miyasudokoro) seems to have designated a moman,especially one of Intimate or Consort rank,who had borne an Emperor or an Heir Apparent a child.」という脚注がついている。
④ ベルー版	
本文	El verano de dicho año,la <u>dama de la Cámara de la Paulonia</u> ,que se sentía extrañamente enferma,expresó el deseo de retirarse donde su familia,lo cual el emperador una vez más no quiso permitir. (p,36)
訳し戻し／非母語話者	その年の夏、 <u>桐の部屋の貴婦人</u> は、奇妙にも具合がおもわしくなく、家族のもとに引き上げたいという願望を示したが、皇帝はそれをまたもう一度認めたくはなかった。
訳し戻し／母語話者	その年の夏、 <u>桐壺</u> の方は、異常に病気がかかっていた故に、家族のところまで退きたいと願いを表したが、今度も帝は許しを下そうとしなかった。

底本訳	その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなんとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。(p.97)
底 本	その年の夏、若宮の母君の御息所は、なんとなく健康をそこねて、養生のため里に下がろうとするが、帝はどうしてもお暇をお許しにならない。
⑤ Ariel 訳	
本 文	En el verano de ese año, la Concubina a la que ahora llamaban <u>Dama del Reposo</u> , enfermó de tanto sufrimiento y deseaba abandonar la corte, pero el no la autorizó de ninguna manera a tomar un período de descanso.
訳し戻し	その年の夏、その内縁の妻は今や安らぎの貴婦人と呼ばれていたが、あまりの苦しみで病になって宮殿を離れたかったが、彼はどうあっても休みの期間を取ることを許可しなかった。

### ◎スペイン語訳の脚注

① Gutiérrez 訳	脚注はナシ
② Roca-Ferrer 訳	脚注はナシ
③ Fibla 訳	7 La madre de Genji, Su título no oficial (Refugio, Miyasudokoro) parece haber designado a una mujer, en especial a una con rango de íntima o consorte, que había dado un hijo a un emperador o un ferederro forzoso. (p.39) 注7. 源氏の母。彼女の非公式の肩書（避難場所、御息所）は女性、特に皇帝あるいは必然的な後継者に息子を産んだ密接な位階を持っている女性あるいは配偶者につけられたように思われる。
④ペルー版	脚注はナシ
⑤ Ariel 訳	7 Dama del Reposo (miyasudokoro), literalmente “lugar de descanso” es una expresión que originalmente denomina a una Consorte o Concubina que ha dado un príncipe al Emperador y por extensión también a una dama que se ha convertido en favorita del Emperador, aun si no ha dado a luz a un príncipe. En este capítulo el término Dama del Reposo se utiliza exclusivamente para referirse a la Concubina favorita del Emperador. 注7. 安らぎの貴婦人（御息所）、文字通り「休息の場所」は元々は皇帝に王子を産んだ夫人あるいは内縁の妻、そして広義には皇帝のお気に入りになった貴婦人に命名する表現である。この章では安らぎの貴婦人は皇帝のお気に入りの内縁の妻に言及するためにもっぱら使われている。

◎イタリア語訳

① Motti 訳	
本文	Nell'estate di quell'anno la <u>dama</u> cadde in grave abbattimento. Chiese piú volte il permesso di tornare a casa sua, ma non l'ottenne. (p.10)
訳し戻し	その年の夏に更衣が意気消沈してしまった。何度も実家に帰させてもらうように頼んだが、許されなかった。
底本	In the summer of that year <u>the lady</u> became very downcast. She repeatedly asked for leave to go to her home, but it was not granted. (p.9)
底本訳	その年の夏に、この女性はたいへん気分がすぐれなくなった。くりかえし里に行く許可を求めたが許されない。(p.19)
② Orsi 訳	
本文	Nell'estate di quell'anno la <u>Dama del Padiglione</u> della Paulonia, sofferente per qualche malessere di cui non era chiara l'origine, chiese di poter fare ritorno nella propria famiglia, ma Sua Maestà non le accordò il permesso. (p.5)
訳し戻し	その年の夏、桐壺の更衣は原因不明の病気を患って、実家に帰ろうとしたが、帝はそれを許さなかった。
底本1 / 『日本古典文学全集』	その年の夏、御息所、はかなぎ心地にわづらひて、まかでなんとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。(p.97)
底本1 / 『日本古典文学全集』 訳	その年の夏、若宮の母君の御息所は、なんとなく健康をそこねて、養生のため里に下がろうとするが、帝はどうしてもお暇をお許しにならない。
底本2 / 『新日本古典文学大系』	その年の夏、御息所、はかなぎ心ちにわづらひて、まかでなんとし給ふを、暇さらにゆるさせ給はず。(p.7)

◎イタリア語訳の脚注

該当の語に脚注はナシ

スペイン語の Gutiérrez 訳とイタリア語訳の Motti 訳について、原文の「御息所」に対応する部分をとりあげてみた。Gutiérrez 訳では「貴婦人」となっており、『西和中辞典』<sup>2</sup>によれば下線部の「dama」には「貴婦人」・「侍女／女官」という意味があることがわかる。Motti 訳ではこの部分は「dama」となっており、『伊和中辞典』<sup>3</sup>によると「夫人」・「貴婦人」・「貴族階級の女性」などの意味がある。しかしこの部分の訳し戻

2 『西和中辞典』 p.586 (小学館、2000年)

3 『伊和中辞典 第2版』 p.443 (小学館、1999年)

しは「更衣」であり、文脈を考えた訳となっている。

一方、底本である Wally 訳を見ても「the lady」という語が該当し、その訳し戻しは「この女性」となっている。「この女性」は桐壺更衣をさすが、更衣は「御息所、はかなき心地…」という場面よりも前に登場している。冒頭の「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひける中に…」である。ここでは2回目以降の登場であるため、重複を避けたものと考えられる。冒頭部分において底本で「更衣」そのものをあらかず語は「衣装の間(に仕える女性)」という意味をもつ「Wardrobe」にあたり、「桐壺更衣」その人をさす語は繰り返しを避けるためか「one」となっている。参考までにスペイン語訳・イタリア語訳ともにその部分をあげておく。

#### 【参考】

原文	いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。
現代語訳	どの帝の治世であったか、女御や更衣がたくさんいらっしやる中に、大変身分が高いわけではないのに、他の方よりもはるかに御寵愛を受けている方がいらっしやった。
スペイン語 (Gutiérrez 訳)	EN la corte de un Emperador -no importa en qué tiempo-vivia entre las <u>numerosas azafatas y damas de la Corte</u> una <u>mujer</u> de condición modesta ,a quien se había favorecido más que a las demás. (p.11) ある皇帝の宮廷において—どんな時代かは重要ではないが— <u>宮廷の多くの侍女と貴婦人たちの間で低い身分の女性が暮らしており、他の誰よりもひいきにされていた。</u>
イタリア語 (Motti 訳)	Alla Corte di un Imperatore(che visse non importa quando ) tra le <u>molte gentildonne di Camera e Guardaroba</u> ce n'era <u>una</u> che,sebbene non fosse di altissimo grado,godeva molto piú favore di tutte le altre; (p.7) (いつの時代だったか) ある帝の御世では、大勢仕えていた女御や更衣の中で、さほど高い身分ではなかったものの、他の女性に比べてとりわけ寵愛を受けていた女がいた。
底本	At the Corte of an Emperor (he lived it matters not when) there was among the <u>many gentlewomen of the Wardrobe and Chamber</u> one,who though she was not of very high rank was favoured far beyond all the rest; (以下略、 p.7)



底本訳	ある天皇の宮廷に（彼がいつの時代に行き去ったのかはどうでもよい）、 <u>衣装の間や寢室につかえる女性たち</u> 「更衣・女御」が大勢いたなかに、とても身分が高いわけではなかったが、ほかの者たちよりもはるかに寵愛を受けている人がいた。（p.15）
-----	--

それでは「御息所」という語に戻って、スペイン語の Gutiérrez 以外の訳について見ておきたい。同じくスペイン語訳である Fibla 訳では「避難場所」となっている。この訳については、底本である Tyler 訳にある「Haven（避難場所）」を忠実に訳したことからきていることがわかる。一方、「安らぎの貴婦人」と訳された Ariel 訳は、底本のデータが公開されていないため、翻訳された本文との比較ができない。しかし、どちらにしても天皇の御休息所である「みやすみどころ」という本来の意味を含んだ訳であると考えられる。

## （2）儀礼・行動に関する語

### 「袴着」

「袴着」は下記にあるように儀式のひとつであるが、まず「袴」がどう訳されているかを見てみると、長いスカート・ズボン・長靴という訳が出てくる。長いスカートとズボンは、袴の形状に由来する訳であると推測できるが、Roca-feller 訳の「長靴」はどこに由来する訳であるのかははっきりしない。全体的に見て、「誰かが何かを贈るという儀式」であるということから離れた訳はないが、「袴」そのものを正確に翻訳することは難しいと考えられる。

《語の意味》男女児が初めて袴を着ける成人儀式。平安中期、公家に行われ、中世以降武家にも、また近世（男児）には民間で行われることもあった。中古の公家では、三歳を主として通常六、七歳までに行われた。（4-p.1035）

【原文】この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮のたてまつりしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。

【現代語訳】この御子が三歳におなりの年、御袴着の儀式を、一宮が儀式でお召しになったものに劣らず、内蔵寮、納殿の物のあるだけ使って、盛大に行わせる。

◎スペイン語訳

① Gutiérrez 訳	
本文	El joven príncipe cumplía entoces tres años.La <u>ceremonia del hakamaghi</u> se celebró con la misma solemnidad que para con el príncipe heredero. (p.14)
訳し戻し	幼い王子はその時三歳になっていた。ハカマギの儀式は皇太子と同じ厳肅さをもって執り行なわれた。素晴らしい贈り物が皇帝の王位所して公共広場から押し寄せた。
底本	The young prince was now three years old.The <u>Putting on of the Trousers</u> was performed with as much ceremony as in the case of the Heir Apparent. Marvellous gifts flowed from the Imperial Treasury and Tribute House. (p.8)
底本訳	若い皇子もいまや三歳である。袴着の儀式は第一の皇子の場合と同じように厳かにとりおこなわれた。素晴らしい贈り物が天皇家の宝物殿や御物殿がふんだんに出された。(p.19)
② Roca-Ferrer 訳	
本文	Quando el príncipe cumplió tres años,el Tesoro imperial no ahorró nada para que la <u>fiesta de sus primeras calzas</u> resultase tan fastuosa como la que en su día se celebrara en honor del heredero aparente. (p.86)
訳し戻し	王子が3歳になった時、皇室の国庫は彼の最初の長靴の祭りが明らかな後継者に敬意を表して彼の日に行われた祭りと同じくらいきらびやかになるように何も惜しまなかった。
③ Fibla 訳	
本文	Quando el niño tres años,tuvo lugar la <u>ceremonia de la puesta de pantalones</u> ,tan impresionante como lo fuera en su día la del primogénito,y para la ocasión se reunieron todos los tesoros del Depósito de la Corte y los Almacenes Imperiales. (p.38)
訳し戻し	子供が3歳になった時、ズボンの着衣の儀式が催され、長子の儀式のときのように彼の日も堂々たるもので、この折には宮廷の倉庫と皇室の倉庫にある全ての宝が集められた。
底本	In the child's third year his father gave him a <u>donning of the trousers</u> just as impressive as his firstborn's,marshaling for the purpose all the treasures in the Court Repository and the Imperial Stores. (p.4)

底本訳	子どもが3歳になった年、彼の父は第一子の時と同じように彼に袴を与える儀式を行い、その目的のために宮廷の倉庫と皇室の倉庫にある全ての財物が集められた。
④ペルー版	
本文	El año en que el nuevo príncipe cumpliera tres, para la <u>ceremonia de imposición de los faldones</u> , el soberano no menos que cuando lo hiciera el Primer Príncipe ordenó un gran ceremonial que agotó los recursos del tesoro, al efectuarse con sumo boato. (p.36)
訳し戻し／非母語話者	新しい王子が三歳になった年、長いスカートの授与の儀式のために、君主は一第一王子がそれをした時に劣らず一盛大な祭事を命じ、とても豪華にとり行って資産は底をついた。
訳し戻し／母語話者	新御子は三歳になる年、帝、袴着の儀式の際、第一御子の時に劣らず、壮大な豪華さで行われた大いなる儀礼のため国庫を尽くした。
底本訳	この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮の奉りしに劣らず、内蔵寮納殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。(p.97)
底本	この若宮が三歳におなりの年、御袴着の儀式を、さきに一の宮がご使用になったものに劣らぬように、内蔵寮や納殿の財物をありたけ用いて、盛大にとり行なわせる。
⑤ Ariel 訳	
本文	El año en que el segunda príncipe cumplió los tres, Su Majestad le regaló un juego de pantalones en nada inferior al que tenía el primer príncipe, para lo cual utilizó hasta el último recurso de los Almacenes Imperiales y las Arcas del Tesoro Imperial.
訳し戻し	第二王子が3歳になった年に、陛下は彼に第一王子が持っていたものよりも何ら劣ることのないズボンの一式を贈った。そのために皇室の倉庫と皇室の宝の金庫の最後の手段まで使った。

### ◎スペイン語訳の脚注

① Gutiérrez 訳	6 O 《posesión de calzas》, que señalaba el paso de la primera a la segunda infancia. Se celebraba generalmente cuando el niño cumplía los cinco años. (p.14) 注6. すなわち「長靴下の所有」であり、第一から第二幼少期への通過を示していた。一般的には子供が5歳になったときに行われた。
② Roca-Ferrer 訳	31 La ceremonia llamada del hakama. 注31. いわゆる袴の儀式。(p.86)
③ Fibla 訳	脚注はナシ
④ペルー版	脚注はナシ
⑤ Ariel 訳	脚注はナシ

◎イタリア語訳

① Motti 訳	
本 文	Il giovane Principe aveva adesso tre anni. <u>L'Indossamento dei Calzoni fu celebrato con un cerimoniale</u> come quello in uso per l'Erede Legittimo. (p.9)
訳し戻し	若宮はもう三才となっていた。第一皇子の時に劣らぬように、ズボン <small>の儀式</small> が内蔵寮や納殿の宝物を使い果たすほどに、大層盛大に催されました。
底 本	The young prince was now three years old. <u>The Putting on of the Trousers</u> was performed with as much ceremony as in the case of the Heir Apparent. Marvellous gifts flowed from the Imperial Treasury and Tribute House. (p.8)
底本訳	若い皇子もいまや三歳である。袴着の儀式は第一の皇子の場合と同じように厳かにとりおこなわれた。素晴らしい贈り物が天皇家の宝物殿や御物殿がふんだんに出された。(p.19)
② Orsi 訳	
本 文	Quando il Principino ebbe ter anni,in occasione della prima <u>vestizione degli hakama</u> furono messe a disposizione tutte le risorse del Tesoro imperial e dai Magazzini de Corte per assicurargli una cerimonia fastosa,in nulla inferior a quella riservata al primogenitor. (p.5)
訳し戻し	若宮が三才になった年、初めて袴を着る儀式は、長男の式に劣らないように、内蔵寮や納殿の財物をふんだんに使い尽くして盛大に行われた。
底本 1 / 『日本 古典文学全集』	この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮の奉りしに劣らず、内蔵寮納殿の物を尽くして、いみじうせさせたまふ。(p.97)
底本 1 / 『日本 古典文学全集』 訳	この若宮が三歳におなりの年、御袴着の儀式を、さきに一の宮がご使用になったものに劣らぬように、内蔵寮や納殿の財物をありたけ用いて、盛大にとり行なわせる。
底本 2 / 『新日 本古典文学大系』	この御子三に成たまふ年、御袴着の事、一の宮のたてまつりしにおとらず、内蔵寮、おさめ殿の物を尽くして、いみじうせさせ給ふ。(p.7)

◎イタリア語訳の脚注

① Motti 訳	脚注はナシ
② Orsi 訳	7 Hakama:cfr.Glossario.

### (3) 場所 (役所・国も含む)・家屋

#### 「雲居」

「雲居」はさまざまな意味をもつ語である。ここでは「宮中」をさす比喩的な表現と言えるが、訳を見てみると「雲」や「天」と訳されているものが目立つ。「雲居」を《語の意味》の〔4〕にあげた、「皇居を大空にたとえて仰ぎ見ること」という考えでとらえれば、離れすぎた訳とは言えない。「雲居」をそのまま翻訳したともとれる。しかし、以下の3つのように「雲居」を直接翻訳する形をとらない訳もある。具体的には、〈1〉スペイン語の Ariel 訳のように、本文では「雲居」について詳細に触れずに脚注で説明をする形、〈2〉イタリア語の Motti 訳のように、底本に書かれている部分を省略して意訳する形がある。なお〈2〉については、本文では「nuvole」という「雲」を意味する単語が使われているが、訳し戻しにはこの語がない。〈3〉同じくイタリア語の Orsi 訳のように、「雲居 (宮中) を驚かす」のは「宮中にいる人を驚かす」という意味であるとして、そこから「宮中の人」という意味を含んで「雲の上の人」という訳をする形などである。

《語の意味》〔1〕雲のかかっているところ。天空。〔2〕雲に同じ。静止している雲にも、わき起こりつつある雲にもいう。〔3〕雲のかかっている遠方。〔4〕皇居。宮中。皇居を大空にたとえて、はるかに仰ぎ見ることからいう。平安時代以後見える。〔5〕皇居のある地。みやこ。(2-p.238)

【原文】わざとの御学問はさるものにて、琴、笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続ければ、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。

【現代語訳】経書類や漢詩文をつくるという学問は申すにおよばず、琴、笛の音にも宮中を驚嘆させ、そのほか一つ一つ数えあげていくと、大げさで嫌になるようなご様子であった。

◎スペイン語訳

① Gutiérrez 訳	
本文	A través de sus estudios le oyeron bien pronto lanzar hacia las <u>nubes</u> los sonos de su koto y de su flauta. Pero si se continuaran describiendo todas las perfecciones de este pequeño personaje, no tardarían en cansar. (p.24)
訳し戻し	彼の勉強を介して、彼がすぐに雲に向けてコトと笛の音を発しているのを聞いた。しかし、もしこの小さい重要人物の全ての長所を描写し続けたら、すぐに疲れてしまうだろう。
底本	As for his serious studies, he soon learnt to send the sounds of zither and flute flying gaily to the <u>clouds</u> . But if I were to tell you of all his accomplishments, you would think that he was soon going to become a bore. (p.15)
底本訳	まじめな学問について言えば、すぐに琴や笛の音を華やかに雲にまで飛ばすようになった。だか、もし私かその才能のすべてを語ったら、この少年はすぐにうんざりするような人間になってしまう、とあなた方は思うだろう。(p.34)
② Roca-Ferrer 訳	
本文	該当ナシ
③ Fibla 訳	
本文	Se aplicaba a los estudios formales de una manera natural, pero también hacía que los <u>cielos</u> resonaran con la música de los instrumentos de cuerda y de la flauta. De hecho, si tuviera que relacionar todo aquello en lo que se relacionaba, tan sólo lograría hacer que pareciera absurdo. (p.48)
訳し戻し	自然と正式な学業にも精を出したが、天を弦楽器と横笛の音楽で鳴り響かせた。実際、もし傑出していること全てを表にしなければならぬとすれば、馬鹿馬鹿しく思わせるようになるだけであろう。
底本	Naturally he applied himself to formal scholarship, but he also set the <u>heavens</u> ringing with the music of strings and flute. In fact, if I were to list all the things at which he excelled, I would only succeed in making him sound absurd. (p.12)
底本訳	自然と正式な学問にも専念したが、彼は弦楽器と笛の音楽で天を鳴り響かせた。事実、もし彼が飛び抜けて優れていることを全て記録するならば、私は彼を馬鹿げた感じに思わせるだけになるだろう。
④ ベルー版	
本文	No requiero hablar de los logros del príncipe menor en las materias de estudio obligatorio, si de música se trataba, sus tonos de flauta y koto hacían eco en los <u>cielos</u> , suscitando el asombro de todo el palacio, mas si todo el recuento hiciera parecería exagerado. (p.49)

訳し戻し／非母語話者	義務的な学問の科目において幼い王子の成果を話す必要はない。もし音楽となれば、彼の笛とコトの音色は空に響き、宮廷中の驚嘆を呼び起こすのだが、全てこれらを数え上げれば、大げさに思えるだろう。
訳し戻し／母語話者	御子の必修科目に功績を別に置いて、音楽のことだったら、笛とコトの音色は空にも響かせ、宮殿中に驚きを招きながら、すべてを語ると誇張が過ぎると思われる。
底本訳	わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲をひびかし、すべて言ひつづけば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。(p.115)
底本	表向きの学問は申すに及ばず、琴、笛の音にも、宮中をあげて驚嘆させ、そのほか一つ一つ数えたてていくと、大げさすぎていやになってしまうようなご様子だったのである。
⑤ Ariel 訳	
本文	Como era de esperarse, brilló en sus estudios de los clásicos en chino, y también el sonido de su arpa y su flauta hacían resonar las nubes, y si continuara contando todas sus virtudes terminaría por parecer una persona que exagera de forma desagradable.
訳し戻し	期待されていたように、中国語の古典の勉強においても輝き、また彼のハーブと笛の音は雲を鳴り響かせ、もし全ての彼の長所を語り続けければ、不快な方法で誇張した人のように思われて終わるだろうに。

### ◎スペイン語訳の脚注

① Gutiérrez 訳	脚注はナシ
② Roca-Ferrer 訳	脚注はナシ
③ Fibla 訳	脚注はナシ
④ ベルー版	脚注はナシ
⑤ Ariel 訳	56 La corte, La expresión “las nubes” (kumoi) es una forma convencional de referirse al palacio imperial “Hacían resonar las nubes” (kumoi wo hibikashi) significa entonces “le ganaron excelente reputación en la sociedad cortesana”. 注 56. 宮殿。「雲」(クモイ)という表現は皇居に言及する一つの慣習的な形である。「雲を共鳴させる」(クモイヲヒビカシ)はそれでは「宮廷社会で素晴らしい名声を得る」ことを意味する。

### ◎イタリア語訳

① Motti 訳	
本文	Quanto agli studi seri, egli presto imparò a sprigionare verso le <u>nuvole</u> in un gaio volo le note della cetra e del flauto. Ma se dovessi descrivervi tutte le sue perfezioni, pensereste che sarebbe diventato presto un seccatore. (p.19)

訳し戻し	正式の学問に関していうと、あっという間に琴や笛を完璧に操るようになった。しかし、彼が優れていることを一つひとつ挙げると、大げさすぎて嫌いになってしまうのかもしれないので、やめておこう。
底 本	As for his serious studies,he soon learnt to send the sounds of zither and flute flying gaily to the <u>clouds</u> . But if I were to tell you of all his accomplishments,you would think that he was soon going to become a bore. (p.15)
底本訳	まじめな学問について言えば、すぐに琴や笛の音を華やかに雲にまで飛ばすようになった。だか、もし私がその才能のすべてを語ったら、この少年はすぐにうんざりするような人間になってしまう、とあなた方は思うだろう。(p.34)
② Orsi 訳	
本 文	Inutile parlare dei suoi progressi negli studi; anche la sua abilità nel suonare il koto e il flauto era tale da stupire perfino gli abitanti delle <u>nuvole</u> , ma se dovessi enumerare una per una tutte le sue qualità , gli elogi suonerebbero esagerati e in fin dei conti fastidiosi. (p.14)
訳し戻し	学問にも優れていたことは言うまでもなく、琴や笛を操る才能も、雲の上の人を驚かせるほどだったが、それを一つ一つ挙げていくと、大げさすぎて嫌いになってしまうのかもしれない。
底本 1 / 『日本 古典文学全集』	わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲をひびかし、すべて言ひつづけば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。(p.115)
底本 1 / 『日本 古典文学全集』 訳	表向きの学問は申すに及ばず、琴、笛の音にも、 <u>宮中</u> をあげて驚嘆させ、そのほか一つ一つ数えたてていくと、大げさすぎていやになってしまうようなご様子だったのである。
底本 2 / 『新日 本古典文学大系』	わざとの御学問はさる物にて、琴、笛の音にも雲を響かし、すべて言ひつづけばことごとしう、うたてぞ成ぬべき人の御さま成ける。(p.19)

#### ◎イタリア語訳の脚注

① Motti 訳	脚注はナシ
② Orsi 訳	Koto:cfr.Glossario.

#### (4) 調度・乗り物・書画・色など

##### 「輦車」<sup>4</sup>

海外にも人の力で動く車は多数存在し、古代ローマで使われたとされるレクティカやトルコのタフトウレワンのように日本の「輿」に近い乗

4 『石山寺縁起』二十九紙の上部（梅津次郎編集担当『新修日本絵巻物全集 22 巻 石山寺縁起』角川書店、1979 年）



り物がある。実際、翻訳を見てみると、「担架」・「輿」・「籠」と多彩な翻訳がでてくる。スペイン語の Gutiérrez 訳は、基本的に底本 Wally 訳に忠実であるが、底本の訳し戻しにある「輦車」と異なり、「担架」という翻訳になっている。病気になった更衣を運ぶための乗り物という発想から出てきた訳である可能性がある。

《語の意味》人が手で移動させる乗用の車。輦（れん）の両側に車輪を付けたもので、前後の轆（ながえ）に、ふつう十二人の官人がつく。屋形部の形態は、用途によりさまざまである。撰関や功績のあった大臣、老齢の高僧、内親王・女御などの高貴な女性の内裏への出入りに、特別の宣旨によって許されるもの。(4-p.532)

【原文】輦車（てぐるま）の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。

【現代語訳】輦車をお許しになる宣旨などを仰せ出されてからも、また更衣の部屋にお入りになっては、どうしても彼女の退出をお許しに出来ない。

### ◎スペイン語訳

① Gutiérrez 訳	
本文	Apesadumbrado y perplejo, pidió una <u>camilla</u> para transportarla. (p.14)
訳し戻し	苦しんで、困惑して、彼女を運ぶための担架を頼んだ。
底本	In great trouble and perplexity he sent for a <u>hand litter</u> . (p.9)
底本訳	とても心配し、困惑しながら輦車の用意をさせた。(p.20)
② Roca-Ferrer 訳	
本文	El emperador ordenó que se le concediera el honor de una <u>litera y cuatro porteadores</u> para el traslado, pero, en cuanto todo estuvo ya a punto para el viaje, volvió una vez más al aposento de la dama. (p.87)
訳し戻し	皇帝は移動のために輿と4人の運搬人の荣誉を彼女に授けるよう命じたが、すべてがもう移動の準備ができた途端に、もう一度貴婦人の部屋に戻った。

③ Fibla 訳	
本文	Incluso tras haber firmado un decreto que concedía a la dama el privilegio de un <u>carruaje tirado por sirvientes</u> , entró de nuevo en el aposento de ella, incapaz de permitir que se marchara. (p.39)
訳し戻し	召使によって引かれる車を使う特権を貴婦人に与える命令に署名した後でさえも、再び彼女の部屋に入り、彼女が去るのを許すことができなかった。
底本	Even after issuing a decree to allow her the privilege of a <u>hand carriage</u> , he went in to her again and could not bring himself to let her go. (p.5)
底本訳	彼女に輦車を使うことを許可するように命令をした後でさえも、彼はもう一度彼女の所に行き、退出するのを許すことができなかった。
④ ベルー版	
本文	E incluso cuando queriendo ayudarla finalmente ordenara que la portaran en <u>palanquin</u> , sin pausa, hasta su casa, de retorno en su alcoba él no pudo resolverse a acordarle el cese. (p.36)
訳し戻し／非母語話者	そして彼女を助けたくて休まずに家まで籠で彼女を家まで運ぶように命じた時でさえも、彼女の寝室に戻ると彼はそれを中止することを決心できなかった。
訳し戻し／母語話者	ついに、彼女を助けようとしたときも、手車で、休憩なく家まで送るのを命令したさえ、部屋に戻った途端、暇を許す決心も付けなくなった。
底本	輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。(p.98)
底本訳	輦車をお許しになる宣旨などを仰せ出されてからも、またお部屋におはいらになつては、どうしても退出をお許しに出来ない。
⑤ Ariel 訳	
本文	Ordeño que se le concediera el privilegio de montar en un <u>palanquin</u> , en contro del reglamento, entró en su habitación, (pues) no le resultaba posible dejarla ir.
訳し戻し	彼女に輿に乗る特権を与えるように命じた。規則に反して彼女の部屋に入った。だから彼女を行かせることはできなくなった。

### ◎ スペイン語訳の脚注

① Gutiérrez 訳	脚注はナシ
② Roca-Ferrer 訳	脚注はナシ
③ Fibla 訳	脚注はナシ
④ ベルー版	脚注はナシ
⑤ Ariel 訳	9 Un privilegio reservado a nobles de muy alto rango, y por tanto otra excepción en favor de su Concubina. 注9 とても高い位の貴族専用の特権でそれゆえ彼の内縁の妻のひいきの強調された別の例である。

◎イタリア語訳

① Motti 訳	
本 文	Molto turbato e smarrito, mandò per una <u>portantina</u> . Ma quando fecero per deporvela, egli lo vietò, dicendo: (p.10)
訳し戻し	帝はひどく動揺していたが、 <u>輦車</u> が来るように手配をした。しかし、更衣が輦車に乗ろうとしていたときに、それを許さず、次のように話した
底 本	Apesadumbrado y perplejo, pidió una <u>camilla</u> para transportarla. (p.9)
底本訳	とても心配し、困惑しながら輦車の用意をさせた。(p.20)
② Orsi 訳	
本 文	Diede ordine che le venisse concesso l'onore di un <u>palanchino</u> , ma quando rientrò nelle stanze della dama ancora non riuscì a rassegnarsi a lasciarla partire. (p.6)
訳し戻し	出発のときに輦車を出すように命令をしたが、更衣の部屋を再び訪れた際に、やはり行かないでほしいと嘆く。
底本1 / 『日本 古典文学全集』	輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえゆるさせたまはず。(p.98)
底本1 / 『日本 古典文学全集』	輦車をお許しになる宣旨などを仰せ出されてからも、またお部屋におはいらりになつては、どうしても退出をお許しに出来ない。
底本2 / 『新日 本古典文学大系』	手車の宣旨などのたまはせても、また入らせ給ひて、さらにえゆるさせ給はず。(p.8)

◎イタリア語訳の脚注

該当の語についての脚注はナシ

(5) 動物(昆虫を含む)に関する語

「鈴虫」<sup>5</sup>

以前、スペインやヨーロッパの一部では蝉が生息していないという話があった。「蝉」と同じく日本ではなじみのある虫がどのように翻訳されているのかを見てみる必要があり、この語を抽出した。訳を見てみると、「鈴虫」とそのまま訳したものの他にコオロギの訳が目立つ。スぺ

5 関口俊雄作「コオロギのおもな種類(標本画)」

(コトバンク「ツツレサセコオロギ」<https://kotobank.jp/word/%E3%83%84%E3%83%85%E3%83%AC%E3%82%B5%E3%82%BB%E3%82%B3%E3%82%AA%E3%83%AD%E3%82%AE-1564683>、2015年8月20日閲覧)

インの Fibla 訳の場合は底本 Tyler 訳の影響で「鈴のコオロギ」となっており、ペルー版では脚注で「鈴虫イコール鈴のついたコオロギ」となっている。なお平安時代の「鈴虫」は現在では「松虫」にあたるという説がある。どちらもコオロギの一種であるため、各国語訳にある「コオロギ」という訳はあまり原文から離れた解釈ではないとも言える。

《語の意味》〔1〕松虫（まつむし）の古称。季語、秋。〔2〕直翅目こおろぎ科の昆虫。草原・土手・石垣などにすむ。体長は約二センチメートル。頭は小さく、体は平たい卵形で、黒く、形も色も水瓜の種に似るといわれる。触角は細くて非常に長い。秋に「リーンリーン」と鳴く。漢名は金撞児、月鈴児。中古・中世の文学作品に「すずむし」と見えるものは今の松虫で、「まつむし」と見えるものが今の鈴虫である（古今要覧稿、松虫鈴虫考）（以下略、3-p.464）

また、『日本大百科全書』（ジャパナレッジ出典）によると、鈴虫は「スズムシ科」、松虫は「マツムシ科」に属しているが、どちらも「コオロギ類」の一種であるとしている。

【原文】 鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな

【現代語訳】 鈴虫のように声の限りを尽くして泣いても、秋の長い夜があけないくらい涙が流れていくことよ

### ◎スペイン語訳

① Gutiérrez 訳	
本文	Sin descanso, como la voz eterna de los <u>grillos</u> reales, hasta el amanecer, toda la noche, he llorado. (p.20)
訳し戻し	休みもなく、本当の <u>コオロギ</u> の永遠の声のように、夜が明けるまで、私は泣いた。
底本	Ceaseless as the interminable voices of <u>bell-cricket</u> , all night till dawn my tears flow. (p.12)
底本訳	<u>鈴虫</u> のやむことのなし鳴き声のようにたえまなく、夜明けまでひと晩じゅう私の涙は流れる (p.28)
② Roca-Ferrer 訳	

本文	La noche de otoño es demasiado breve para contener todas mis lágrimas por más que el canto de grillo insista en romper el silencio. (p.91)
訳し戻し	秋の夜は全ての私の涙をこらえるにはあまりに短い。どんなにコオロギの鳴き声が沈黙を破ることに固執しようとも。
③ Fibla 訳	
本文	Los grillos cascabel pueden cantar hasta cansarse,mas en mi caso no así,pues durante la noche interminable mis lágrimas caerán ensin los cesar. (p.45)
訳し戻し	鈴のコオロギは疲れるまで泣くことができる。しかし私の場合はそうではない。終わらない夜の間、私の涙は止まることなく落ちるだろうから。
底本	Bell crickets may cry until they can cry no more,but not so for me,for all though the endless night may tears will fall on and on. (p.9)
底本訳	鈴のコオロギはこれ以上泣くことができなくなるまで泣くだろう。しかし私にとってはそうではない。終わるのない夜の間、私の涙は止まることなく落ちるだろうから。
④ ベルー版	
本文	Si afanarme yo debiera,igual que el grillo-campana,con mi más fuerte quejido,noche otoñal no bastara para terminar mi lloro. (p.43)
訳し戻し／非母語話者	もし私が鈴虫の鳴き声と同様に私の一番強いうめき声をもって精一杯頑張らないといけないなら、秋の夜は私の涙を止めるには十分ではないだろうに。
訳し戻し／母語話者	鈴虫のように いそしむなら より高くむせび入って 鳴き声収まるまで 秋のよる程の足りないよ、
底本	鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな (p.108)
底本訳	鈴虫の…… (あの鈴虫のように声の限りをしぼって泣きつくしても、涙は尽きず、秋の夜長も足りないくらいに、とめどなくこぼれる涙ですこと)
⑤ Ariel 訳	
本文	La larga noche en que los grillos cantan,como campanillas,hasta quedarase sin voz,me resulta insuficiente para llorar todas mis lágrimas.
訳し戻し	コオロギが鈴のように声が無くなるまで鳴く長い夜、私の涙を全て流すためには十分ではない。

◎ スペイン語訳の脚注

① Gutiérrez 訳	脚注はナシ
② Roca-Ferrer 訳	脚注はナシ
③ Fibla 訳	脚注はナシ

④ペルー版	19 El grillo era llamado suzumushi (grillo - sonaja) .La palabra vinculada,engo fulu,significa 《derramar lágrimas como lluvia》 y también 《agitar la ampanilla el grillo (suzumushi)》 (p.43) 注 19 そのコオロギは鈴虫(鈴のついたコオロギ)と呼ばれていた。つながれた言葉 engo furu は「涙を雨のように降らす」で、また、「鈴のコオロギ(鈴虫)を揺らす」を意味する。
⑤ Ariel 訳	35 “Grillo” (suzumushi) es un juego de palabras con “campana” (suzu) Furu significa “llorar”,y tambien “agitar”.En este último sentido,suzu y furu son palabras asociadas (engo) . 注 35 コオロギ(スズムシ)は「鈴」(スズ)との言葉遊び。フルは「泣く」、また「振る」を意味する。この最後の意味ではスズとフルは結びついた言葉である(縁語)。

### ◎イタリア語訳

① Motti 訳	
本文	recitò la poesia che dice: 《Ininterrotte come le incessanti voci dei garruli <u>grilli</u> ,tutta la notte sino all'alba scorrono le mie lacrime》 . (p.15)
訳し戻し	鈴虫の声が一晩中絶えず響き渡ると同じように、夜が明けても私の涙が止まらない
底本	Ceaseless as the interminable voices of <u>bell-cricket</u> , all night till dawn my tears flow. (p.12)
底本訳	鈴虫のやむことのない鳴き声のようにたえまなく、夜明けまでひと晩じゅう私の涙は流れる (p.28)
② Orsi 訳	
本文	Dovessi pure come que <u>grilli</u> consumare la mia voce nel pianto la lunga notte d'autunno non sarebbe sufficiente per le mie lacrime. (p.10)
訳し戻し	鈴虫と同じように、声がある限り 一晩中泣いたとしても 私のすべての涙を流すには 長い秋の夜も短すぎるでしょう。
底本1 / 『日本古典文学全集』	鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな (p.108)
底本1 / 『日本古典文学全集』 訳	鈴虫の…… (あの鈴虫のように声の限りをしぼって泣きつくしても、涙は尽きず、秋の夜長も足りないくらいに、とめどなくこぼれる涙ですこと)
底本2 / 『新日本古典文学大系』	鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜あかずふる涙かな (p.14)

### ◎イタリア語訳の脚注

該当の語についての脚注はナン

## (6) 植物に関する語

### 「紅葉」

スペインには存在しないとされる「紅葉」を抽出した。当初は「かえで」の訳がでてくると予測していたが、訳を見てみると「秋の葉」・「色あせた葉」という訳が目立った。「紅葉」は下記の《語の意味》によると、「葉が赤や黄色に変色すること」や「その葉（葉が赤や黄色に変色した葉）」をさす。先に述べた「御息所」の翻訳と同様に、語の本来の意味に近い訳となっていると考えられる。

ちなみに底本との関係を考える上で特徴的なのは、脚注の位置まで底本である Wally 訳に忠実であったはずの Gutiérrez 訳が、ここでは底本にない箇所を補足した訳になっていることである。

《語の意味》草木の葉が寒さや雨・露・霜などによって黄や赤に変色すること。また、その変色した葉。『万葉集』では大部分が、「黄葉」の文字を使い、萩などについていうことが多い。中世以後、楓（かへで）の紅葉を代表とするようになる。春の花と対応的に表現されることも多い。(5- p.679)

【原文】はかなき花、紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。

【現代語訳】(源氏は) ちょっとした春の花、秋の紅葉にことつけてお気持ちを表わされる。

### ◎スペイン語訳

① Gutiérrez 訳	
本文	Y fue así como, a esta edad tan tierna, la belleza efímera, como las flores y las numerosas hojas de tomó posición de sus pensamientos. (p.27)
訳し戻し	そしてこのように、このくらいあまりに若い年齢で、花や秋の多くの葉のようにはかない美しさは彼の思考に取りついた。
底本	And so ,young though he was, fleeting beauty took its hold upon his thought; he felt his first clear predilection. (p.17)
底本訳	そしてこのようにして、まだ幼かったとはいえ源氏の想いを、はかない美しさが捉えてしまった。(p.38)

② Roca-Ferrer 訳	
本 文	該当部分ナシ
③ Fibla 訳	
本 文	Así pues, Genji no perdía ninguna ocasión ofrecida por una florecilla o una <u>hoja otoñal</u> para hacer saber a la muchacha lo mucho que le gustaba. (p.50)
訳し戻し	したがって、ゲンジはその女の子にどのくらい自分が好きかを知らせるために花あるいは秋の葉によって差し出されたどの機会をも逃さなかった。
底 本	Genji therefore lost no chance offered by the least flower or <u>autumn leaf</u> to let her know in his childish way how much he liked her. (p.15)
底本訳	源氏はしたがって、彼女をどれほど好きであるか幼稚な方法で彼女に知らせるために、少なくとも花や <u>秋の葉</u> を渡す機会を失っていなかった。
④ペルー版	
本 文	El afecto de Genji por la nueva dama se acrecentó , y la flor más ordinaria o una <u>hoja descolorida</u> se tornaron ocasión para expresarlo. (p.54)
訳し戻し／非母語話者	ゲンジのその新しい貴婦人に対する愛情は増して、どんなありふれた花や色あせた葉もそれを示すための機会に変わった。
訳し戻し／母語話者	新しい方へのゲンジの気持ちは増すばかり、極ありふれた花でも色あせた一葉でもその気持ちを表すきっかけとなった。
底 本	幼心地にも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。(p.120)
底本訳	源氏の君は、幼心にも、この宮に対してちよつとした春の花、秋の紅葉につけても、お慕いしている気持をお見知りいただくようになさる。
⑤ Ariel 訳	
本 文	Genji utilizaba cada trivial flor u <u>hoja de otoño</u> para mostrarle su afecto.
訳し戻し	(ゲンジは) それぞれの取るに取らない花や <u>秋の葉</u> を彼の愛情を彼女に見せるために使っていた。

### ◎スペイン語訳の脚注

該当の語についての脚注はナシ

### ◎イタリア語訳

① Motti 訳	
本 文	E così, pur essendo tanto giovane, l'effimera bellezza s'impose ai suoi pensieri; per la prima volta egli sentí una palase predilezione. (p.22)



訳し戻し	このように、まだ幼い源氏の君の心の中に、初めて特別な感情が湧き始めた。
底 本	And so ,young though he was,fleeting beauty took its hold upon his thought; he felt his first clear predilection. (p.17)
底本訳	そしてこのようにして、まだ幼かったとはいえ源氏の想いを、はかない美しさが捉えてしまった。(p.38)
備 考	※該当する語がない。
② Orsi 訳	
本 文	Il giovane Signore d'altronde,nella sua infantile innocenza,coglieva ogni occasione,anche la piú banale-i fiori di ciliegio in primavera,le foglie rosse d'autunno-per manifestarle i propri sentimenti. (p.17)
訳し戻し	若宮は、子供心に、どんなときでも口実を作って一例えば春の桜や秋の紅葉など一藤壺に自分の愛情を伝えていた。
底本 1 / 『日本 古典文学全集』	幼心地にも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。(p.120)
底本 1 / 『日本 古典文学全集』 訳	源氏の君は、幼心にも、この宮に対してちよつとした春の花、秋の紅葉につけても、お慕いしている気持をお見知りいただくようになさる。
底本 2 / 『新日 本古典文学大系』	おさなごちにも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。(p.23)

## ◎イタリア語訳の脚注

該当の語についての脚注はナシ

### (7) 気象・時間・空間に関する語

#### 「夕月夜」

地域や文化・宗教によって、とらえ方が大きく異なると予測される「月」を表す語について抽出した。

これについては、〈1〉あえて「夕方」や「夕暮れ」など時間を限定せず、「月」という訳をしているものと、〈2〉イタリア語の Orsi 訳のように情景を細かく翻訳しているものという 2 種類の訳があることがわかった。そのほか、基本的に底本の Walley 訳に忠実である Gutiérrez 訳が、底本では「moonlit weather」(月の照る空模様)とする訳のうち、「空模様」を省略する形の訳になっているという特徴がある。同じ底本であるイタリア語の Motti 訳にも同じ傾向が見られ、「luna」(月)がどのような情景であるかという翻訳となっている。

《語の意味》夕方に出る月。夕月（ゆふづき）。夕暮れに月の出ている空。

また、そのころ。(5-p.804)

【原文】夕月夜のをかきほどに、出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。

【現代語訳】夕月の美しいところに、鞍負命婦を出立させなさせて、帝はそのまま物思いにふけておいでになる。

◎スペイン語訳

① Gutiérrez 訳	
本文	Era en un tiempo de <u>luna</u> magnífica.A la partida de la mensajera dejó el Emperador transcurrir su tiempo contemplando la noche. (p.16)
訳し戻し	月が素晴らしい時であった。使者の出発の際、皇帝は夜思いにふけて時を過ごした。
底本	It was beautiful <u>moonlit weather</u> ,and after he had despatched the messenger he lingered for a while gazing out into the night. (p.10)
底本訳	美しく月の照る空模様で、使いを送ったあとでしばらくのあいだなごり惜しうに夜を見つめていた。(p.23)
② Roca-Ferrer 訳	
本文	該当部分ナシ
③ Fibla 訳	
本文	Al anochecer (中略) cuando ella hubo partido bajo una <u>hermosa luna crepuscular</u> ,se sumió nuevo en de sus ensoñaciones. (p.42)
訳し戻し	その後、彼女が黄昏時の美しい月の下出発した時、再び自分の夢想到にひたった。
底本	At dusk (中略) ,then,after she had left under a <u>beautiful evening moon</u> ,he lapsed again into reverie. (p.7)
底本訳	それから、彼女が夕暮れ時の美しい月の下出発した後、彼はふたたび空想に浸った。
④ ベルー版	
本文	A la mágica hora de la <u>luna del anochecer</u> ,la envié a aquel lugar. Y torné a sus remembranzas. (p.39)
訳し戻し／非母語話者	<u>日暮れ</u> の月のうっとりするような時間に彼女をあつ場所に遣わせた。
訳し戻し／母語話者	宵の月の魅惑な頃おいにあの所まで送りました。またその思い出に戻った。
底本	夕月夜のをかきほどに、出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。(p.102)

底本訳	夕月の美しいところに、命婦を出しておやりになって、ご自身はそのままの思いにふけておいでになる。
⑤ Ariel 訳	
本 文	La hizo partir por la <u>noche,bajo una espléndida luna</u> ,que se quedó contemplando abstraído en sus pensamientos.
訳し戻し	夜に見事な <u>月</u> の下に彼女を出発させて、思いにふけて月を見つめていた。

◎スペイン語訳の脚注

① Gutiérrez 訳	脚注はナシ
② Roca-Ferrer 訳	脚注はナシ
③ Fibla 訳	19 Yüzukuyo,la 《luna crepusculara 》 que se cierce en el cielo al anoecer hasta el décimo día del mes lunar. (p.42) 注 19. 夕月夜つまり太陰月で 10 日目まで日暮れの時に空に留まる「夕暮れ時の月」。
④ペルー版	脚注はナシ
⑤ Ariel 訳	脚注はナシ

◎イタリア語訳

① Motti 訳	
本 文	C'era un bel chiaro di <u>luna</u> ,e dopo aver congedato la messaggera egli indugiò un istante a contemplare la notte. (p.12)
訳し戻し	その夜、月 <b>は</b> 明るく辺り一面を照らしていたが、帝はお使いの女性を見送ってからしばらくの間その光景を眺めた。
底 本	It was beautiful <u>moonlit weather</u> ,and after he had despatched the messenger he lingered for a while gazing out into the night. (p.10)
底本訳	美しく月の照る空模様で、使いを送ったあとでしばらくのあいだなごり惜しそうに夜を見つめていた。(p.23)
② Orsi 訳	
本 文	Era una dolce <u>notte illuminata dalla luna</u> sorte al tramontare del giorno ,e dopo aver congedato la donna egli sprofondò nei suoi pensieri. (p.8)
訳し戻し	現れたばかりの月に優しく照らされていた夕焼け空の美しい夜だったが、その女性を送り出してから、帝はぼんやりと思いを巡らしていた。
底本 1 / 『日本古典文学全集』	夕月夜のをかしきほどに、出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。(p.102)
底本 1 / 『日本古典文学全集』 訳	夕月の美しいところに、命婦を出しておやりになって、ご自身はそのままの思いにふけておいでになる
底本 2 / 『新日本古典文学大系』	夕 <u>附</u> 夜のおかしき程に、出し立てさせ給て、やがてながめをはします。(p.10)

## ◎イタリア語訳の脚注

該当の語についての脚注はナシ

## ❁ おわりに

今回はスペイン語とイタリア語にしぼり、特定の語を抽出してみた。第3回研究会（2014年6月6日）での反省をふまえ、底本が判明している本についてはその本文と訳をあげている。翻訳された「桐壺」巻を全体的に見てみると、「御息所」のような人物（官職・位階・立場）に関する語と、「袴着」のような儀礼・行動に関する語を、原文から離れないように翻訳することは困難であることがわかる。普段、古語に接する中で意識せずに使われている語も、日本語以外の言語で的確に表すのは一筋縄ではいかない。そのため、一見、意味が通りにくい訳になっている箇所もあるが、そこには現地の人にわかりやすく伝えるように工夫した跡がかいま見えるのだ。時間の関係上、ほんの一部しか扱う事ができなかったが、多くの翻訳を比較してみると、重訳が多い中で古典から翻訳されている本の存在は貴重であると感じる。

今回の調査研究については、「日本語への訳し戻し」を大いに活用した。しかし、研究会で指摘されたように、一度「日本語への訳し戻し」というフィルターを通すことによる弊害もある。そこに訳し戻しをした人間の目が介在してしまうからだ。外国語に翻訳された古典文学がいかに受容されているかについて、翻訳言語と背景や文化を含めて理解することがよりいっそう必要であり、これは今後の課題である。

（国文学研究資料館 研究員）

# 各国語訳「桐壺」（『源氏物語』『十帖源氏』） 翻訳データについてのディスカッション報告（第6回研究会）

## ❁ 1. 各国語訳『十帖源氏』「桐壺」について

浅川 槇子  
(あさかわ まきこ)

### (1) 『十帖源氏』の多言語翻訳について

本科研では、翻訳を通じて世界各国における日本文化の変容を見るために、2014年度から、『源氏物語』のダイジェスト版である『十帖源氏』の多言語翻訳に取り組んでいる。底本は国文学研究資料館蔵の『十帖源氏』で、現代語訳の作成は畠山大二郎氏（國學院大學兼任講師）が担当し、本稿執筆者が補訂を行った。現在は、6言語10種類の翻訳が完了している。以下にその言語と翻訳担当者の属性をあげる。

表1 言語と翻訳担当者の属性一覧

言語	母語話者	非母語話者	母語人口
イタリア語	○	—	19位
ウルドゥ語	—	○	4位*
英語	○	○	2位
スペイン語	—	○ (日本在住) ○ (スペイン在住)	3位
ヒンディー語	○	○	4位
ロシア語	○	○	7位

ウルドゥ語：主にパキスタンとインド北部で話されている／ヒンディー語：インドで最も話されている  
 ※ヒンディー語にウルドゥ語を含む  
 母語人口データ：文部科学省、2005年  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/06032707/005/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/06032707/005/001.htm)

### (2) 翻訳における問題提起

今回、翻訳担当者のうち3名に「『十帖源氏』を翻訳したことについて」という題材で原稿を寄せて頂いた（85p「翻訳の現場から」参照）。その中には、以下の3つの語について訳出することが困難であったとの意見があった。大きく分けて、①地位や官職を表す語、②儀式を表す語、③仏教関係の用語である。以下、具体的な語を紹介し、今回の議題のひとつとしたい。

なお、『十帖源氏』の本文は、2015年4月以降に公開しているものを使用する。また、『語の意味』について(1)と(2)は、中村幸彦、阪倉篤義、岡見正雄編『角川古語大辞典』第2巻～第5巻(角川書店、1982～1999年)を引用した。(3)は織田得能『仏教大辞典』(大倉書店、1977年)を引用した。

### (3) 訳出困難語句の一覧

#### ①地位や官職を表す語 「女御」

《語の意味》平安時代以後、天皇の正式の妻の地位の呼称。令制の天皇の妻には妃・夫人・嬪の三種が定められているが、これらは家格の高い人でなくてはならず、その資格のある人が少なかったこともあり、平安時代に入るとこの地位の妻はまれになり、代って新しく女御・更衣と呼ばれる妻の地位が設けられるようになった。(中略)更衣の所生の子は賜姓源氏となるのに対して、女御の子は親王になり、その点でも更衣は女官に近い地位であるが、女御は正式の妻の地位である。(4 - p.913)

言語	母語話者
原文	[3丁表] いづれの御時にか、女御かうみ、あまたさぶらひ給ける中に、(略)
現代語訳	いつの時代のことでしょうか、女御や更衣などといったお后が大勢いらした中に、(略)
スペイン語訳 (日本在住非母語話者)	¿En qué época estaban? Entre muchas damas del rango como Nyogo o Koi estaba una mujer, (略)
スペイン語訳 (スペイン在住非母語話者)	Las demás <u>damas</u> de la Corte sentían celos de la amada (略)
イタリア語訳 (母語話者)	Durante il regno di un certo Imperatore, non so bene quando, tra le numerose <u>spose</u> imperiali e dame di corte ce n'era una che, (略)
ロシア語訳 (非母語話者)	При каком государе то было?... Среди многих таких государских наложниц как «Нёго» и «Кои» [Титулы государских наложниц.]
ロシア語訳 (母語話者)	В какую пору то произошло? Среди множества придворных дам и фрейлин, (以下略) (※「女御」に該当する訳なし?)
英語訳 (非母語話者)	In what emperor's era was it? Among the large number of His Majesty's <u>consorts and intimates</u> , (略)
英語訳 (母語話者)	I wonder what reign it was – among the many ladies known as <u>Consorts and Intimates</u> , (略)

## ②儀式を表す語 「元服」

《語の意味》 古代中国の風習が輸入されて行われるようになった男子の成人儀式。十歳くらいから二十歳くらいまでに行われたが、天皇・皇太子、あるいはその家々によって、おおよその年齢は決っていた。和銅七(714)年六月、聖武天皇が皇太子の時に行われたのがわが国での初見。公家では、加冠・理髪を貴人、徳望ある人より選び(天皇元服の時は能冠という役もある)、その手で総角をやめ、冠が加えられ、鬢腋から縫腋へと衣服が改められた。(以下略) (2 - p.386)

言語	母語話者
原文	[8丁表] 源氏の君、十二にてげんぶくし給ひ、(略)
現代語訳	《光源氏》は、《十二歳》で《元服》と呼ばれる成人式をして、(略)
スペイン語訳 (日本在住非母語話者)	A sus doce años, celebraron su mayoría de edad con la <u>ceremonia llamada Genpuku</u> y decidieron que se casaba con una (略)
スペイン語訳 (スペイン在住非母語話者)	El príncipe Hikaru cumplió los 12 años y tuvo su <u>ceremonia de Iniciación</u> .
イタリア語訳 (母語話者)	Quando il Principe Genji compì dodici anni si svolse la <u>cerimonia di vestizione degli hakama</u> .
ロシア語訳 (非母語話者)	Когда Хикару - гэндзи исполнилось 12 лет, совершилась церемония совершеннолетия, «Гэнпуку» [Мальчик перестает детскую причёску в пользу и впервые наденет головной убор для взрослых .].
ロシア語訳 (母語話者)	В двенадцать лет блистательно му Гэндзи была проведена церемония совершеннолетия, (略)
英語訳 (非母語話者)	At the age of twelve, Hikaru Genji went through the <u>ceremony of Coming of Age initiation or Genpuku</u> , as it is known.
英語訳 (母語話者)	When Genji turned twelve, he had the coming of age ceremony known as <u>the genpuku</u> .

## ③仏教関係の用語 「観音」

《語の意味》 舊に光世音、観世音と云ひ観音と稱す。新に観世自在、観自在と云。観世音とは、世人彼の菩薩の名を稱する音を観じて救を垂るる故に観世音と云ひ、観世自在とは、世界を観じて授苦興榮するに自在なるを云。観音に六観音、七観音乃至三十三観音あり。但常に観音と云は、六観音中の聖観音を指す。(以下略、p.337)

言語	母語話者
原文	[2丁表] 観音ノ化身ト云々
現代語訳	〈紫式部〉は、 <u>観音の化身</u> だという伝説もあります。
スペイン語訳 (日本在住非母語話者)	Hay una leyenda que dice que Murasaki Shikibu era un <u>dios budista</u> de la Merced encarnado.
スペイン語訳 (スペイン在住非母語話者)	También dicen que ella era un avatar de la misma <u>Kannon</u> , la diosa budista de la misericordia.
イタリア語訳 (母語話者)	Vi sono anche leggende che narrano che fosse l'incarnazione della divinità <u>Kannon</u> .
ロシア語訳 (非母語話者)	Одна легенда говорит, что она является олицетворением « <u>Каннон</u> » - буддийского святого спасителя.
ロシア語訳 (母語話者)	Существует также легенда о том, что Мурасаки Сикибу является воплощением богини <u>Каннон</u> .
英語訳 (非母語話者)	Murasaki Shikibu is also said to be an incarnation of <u>Kannon</u> .
英語訳 (母語話者)	Murasaki Shikibu may have been an incarnation of the <u>Buddha Kannon</u> .

#### (4) その他

『十帖源氏』の凡例、現代文作成時の留意点および翻訳依頼時の注意事項などについては、巻末資料1を参照のこと。

(国文学研究資料館 研究員)

## ❁ 2. 各国語訳「桐壺」(『源氏物語』『十帖源氏』)について

第6回研究会(2015年8月22日)において、各国語訳「桐壺」(『源氏物語』『十帖源氏』) 翻訳データをもとに以下の意見交換が行われた。

### (1) 翻訳担当者の所感と質疑

#### ① イタリア語訳担当者(母語話者)

日本語からイタリア語にするよりも、イタリア語から日本語にする方が、語彙の問題もあって難しい。イタリアにない役職や儀式に関する語



句については、悩んだ。既存の本を参考にすると、中世に存在した語句をもって当てていることが多い。これは読者が楽しめることを優先したためだろう。また、「中将」などの役職はそのまま直訳すると軍隊のイメージが強く、違和感があるかもしれない。訳さずにそのまま使うことが多い（「中納言」→「Chūnagon」など）。

今回は訳していないが、和歌は難しい。過去のモッティ訳（1957年／アーサー・ウェイリー重訳）では文章のなかに組み込んで表現していたが、これはイタリアの読者は文章中に突然詩が現れることに慣れていないためか。

また、イタリア語には単複男女による差があるので、語句の数や性を明確にしなくてはならない。日本では（風俗として）男女の差も小さいときはないが、イタリアは違う（袴着を「ズボンの儀式」としていることに関連して）。なお、元服に相当する儀式は、中世も含めてイタリアにはない。

モッティ訳とオルシ訳（2012年／完訳）両方を訳し戻したが、50年という経年による差があった。モッティ訳の言葉は少し古さを感じさせる。当時、イタリア全体としては日本に興味のない時代であり、おそらく一般読者ではなくイタリア知識人を対象としている。ウェイリーの英訳を元にしており、中世のイメージが強い。当時の洗練されたイタリア語で書かれている。一般読者向けであるオルシ訳は54帖すべてを原文から訳しており、重訳とは文章の作りが異なる。原文に準じているともいえる。また、50年前と比べると、ヨーロッパ全体がそうだと思うが、現在は日本への関心度が高く、日本語も一部は、日本文化を表す語句としてイタリアで定着している。例えば、布団、着物、障子などは説明せずに、そのまま日本語として使用できる。

## ②ロシア語翻訳担当者（非母語話者）

ロシア語も難しかったところはイタリア語と同じ。わからないだろう語句は注で補足した。ロシア語には単数形／複数形、男性／女性のほか中性がある。複数形は「1冊の本」と「2冊の本」というように数が変わった場合、「本」という名詞が変化する。この変化は「1」「2～4」「5以上」

と三種類あるため、「4～5人の侍女」を訳す場合に困った。これは「何人かの侍女」という表現にした。なお、「何人」は「5以上」という扱いになる。

またロシア語には敬語表現があるのだが、日本とは使い方が異なり、皮肉の表現になる。帝が桐壺更衣のところに通う場面で使用した。

ロシア語は時制が自由な面があり、基本は過去形を使っておいて、一部分だけ現在形にすると今まさに起きたように感じるという手法を使った(歴史的現在)。これはデリュエシナ先生(1991年/完訳)の手法だが、訳す際はできるだけ既存の訳を見ないようにしていた。なお、デリュエシナ訳は教養のある読者向けで、大衆文学を対象としていない。

ロシアも日本語が輸入されているが、イタリアほどではない、桜・空手・着物はわかるが、布団になると厳しい。

## (2) 参加者からの意見

・袴着は歩けるようになったことへの儀式。意識するか、「袴」にこだわるか、呼び名を記号として(「HAKAMAGI」など)表すなら、それはそれでいいかとも思う。(S)

・「最初の長靴の祭」という訳は、「歩くこと」に関連して長靴としているのではないか(ただし、イタリア語翻訳担当者によるとスペインに特にそういった儀式や習俗は特に思い当たらないとのこと。底本が不明なので、訳者の創意か原文の示唆かなどは不明)。(A)

・『十帖源氏』英訳はおとぎ話調で、子ども向けの英訳のようだ(これはこちらで用意した現代語訳がわかりやすくなるように作られたものだったため、それに影響された可能性がある、伊藤先生が回答)。どういう方が訳したのだろうか。訳者によっても変わる、バッググラウンドやプロフィールの記述も必要では。(N)

・訳された『十帖源氏』の元となった現代語訳を作ったときにどうい

ところに注意したのか、現代の日本人も引っかかるところだったのか、という情報も必要ではないか。(T)

・日本でも現代文にするときに問題になるような語句は、どこまで翻訳でやれるのか疑問。訳者の工夫によって訳文なりのニュアンスで伝わる部分もあるとわかった。その場合、訳し戻しではなく、訳文のままでないと意味がないのでは。訳者に返して確認していく作業が必要ではないだろうか。(F)

・元服は中国由来の言葉ではあるが、あまり使わない言葉なので、現代の中国人には意味が通らないのではないだろうか。意味が違うので、語句としては存在するとはいっても、結局は注釈が必要になる。(Z)

・『伊勢物語』のスペイン語訳では、元服時を「15才」としているものがある。スペイン語圏である南米では15才で行うパーティがあるため、そのイメージをもとにしている可能性はある。なお、イタリアでは成人といえば18才、中国では初冠は20才。(ディスカッションより)

(議事録担当：加々良恵子／国文学研究資料館 技術補佐員)



## 翻訳の現場から





## 『十帖源氏』の英訳の感想

ジョン・C・カーン

『十帖源氏』は17世紀の源氏物語の梗概書で、おそらく初めて外国語に訳された梗概書である。なぜいままで訳されていないのか、という質問ははっきりと答えられないが、外国語訳の価値があるかどうかについての疑問があると思う。『源氏物語』は現代語訳でだれでも読める時代には梗概書が必要ない、と思う人はいるであろう。しかし、数百年の間、原文より梗概書が読まれていたので、その時代の人の考えや批評が梗概書に含まれている。『十帖源氏』のような梗概書を読むと、その時代の読者の意見や感想をもっと理解できる。たとえば、梗概書を作るために物語を大部略する必要がある。その略した所と重視した所を見ると、その梗概者が書いている人や読む人に「源氏物語は何なのか」を答えられるであろう。

私は博士論文を桐壺巻の古注釈について書き、この為に桐壺の原文や注釈を英訳しなければならなかった。だから、英訳の難問に取り組んだ。以下の点は苦勞の所だった。

一番難しいのは、「女御」「元服」などのいわゆる「有職故実」の言葉なのである。こんな言葉は訳しても、意味が通じなく、脚注を大量使わないと読者にわかりにくい。私は大抵、源氏物語のタイラー訳(2001年出版)に従った。例えば、「女御」は"Consort"、「藏人少将」は"Chamberlain Lieutenant"に訳した。この訳は恣意的であるが、興味のある読者はタイラー訳やマツカラ氏の『栄花物語』の英訳を見て詳細が分かる。タイラー氏自身も「こういう風に英訳されても、こんな言葉は読者にあまり意味がない。でも、せめて英語の言葉から作った称号だから、(日本語をそのまま使う)より覚えやすく、(物語の読みながら)ようやく読者が分かるようになるだろう」と書いた。

『十帖源氏』は原文の引用が多い。例えば、次の『十帖源氏』から取った文章を見てください。

此かうるの父はなくなり、母北方、いにしへのよしあるにて、御かた／＼にもをとり給はねど、事とある時は、より所なく、心ぼそげ也。

『源氏物語』の原文に比べると：

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方がたにもいたう劣らず、なにごとの儀式をもてなしたまひけれど、とりたててはかばかり後見しなければ、事ある時は、なほ扱ひ所なく心細げなり。

下線の所は『十帖源氏』と一致している。できれば、その一致点を訳に示したかったが、原文を示さず、元の読者もおそらく原文を読んでいなかったので、英訳の読者が分からなくてもいい、と思ってきた。『十帖源氏』と源氏物語の原文の関係はこの英訳より学者の論文の話題に相応しいであろう。

2015年の7月に、新しい『源氏物語』の英訳が出版された。これは第6目の英訳である。『源氏物語』の原文は6回も英訳されても、梗概書・注釈・翻案などはまだ殆ど訳されていない。この『十帖源氏』の英訳はその不足に少しでも対処できればいいと思う。

(ケニオン大学 教授)



## 『十帖源氏』英訳所感

緑川 眞知子  
(みどりかわ まちこ)

「一心三観」(“threefold contemplation in a single mind”)など仏教用語などは、日本研究の世界で一般的になって標準的に使われる英語訳があるので、そういうものをなるべく使うようにしました。呼称や官職名については、タイラー訳に倣いましたが、タイラー訳では特殊な訳語を用いている例もあります。これもできるだけスタンダードになっている英訳があるので、日本人が訳す場合は、自分で新しく英語訳を提出するのではなく、英語圏日本研究の世界で一般的に使われている表現を使っていく方が良いという気がいたします。

また、これは見直しなどをしている気がついたので、「御さうぞく御くしあげのてうど」とあるところ、現代語訳は「着物や装飾品を」とあり、その現代語訳のまま、garments and decorations と訳しましたが、古語の原文を尊重するなら、「御くしあげ」も combs and other things for the hair と訳すべきであろうと思いました。

後は、小さな事かも知れませんが、おぼめかした書き方が『源氏物語』の文体の雰囲気の特徴付けている側面もあるわけですが、現代語訳や英訳になると、それらをきっぱりと言い切ったり、はっきりさせたりしていくので、分かりやすくなるという利点はもちろんありますが、原典の趣や、匂いといったものが薄れてしまうというのは避けられないのだと思います。ただ、これもタイラー氏のような経験豊かで優れた翻訳者になると、そういうものも含めて外国語に置き換えることが出来るのだと思います。

なお、余談ですが、Dennis Washburn 氏による新しい英訳が発売になりました(Norton, 2015)。まだ桐壺の巻しか目を通していませんが、Washburn 訳は脚注の数を減らそうという意図があるのか、本文の中に解説を沢山いれすぎていて、本文の美しさが損なわれているという印象

を受けました。他にも心中思惟をイタリック体にしていますが、語り手の言葉か登場人物のそれなのか、グレイゾーンにあるものについても登場人物のそれと割り切っている点、問題があるかと思われましたし、和歌を3行に訳しています。和歌英訳の世界に新機軸を打ち出しているということでしょうか、欧米における和歌英訳の伝統を振り返ると、今後どのような議論を巻き起こすのか興味深い所です。

(早稲田大学 非常勤講師)

## 『十帖源氏』スペイン語翻訳における 文化的レファレンスの取り扱い

猪瀬 博子  
(いのせ ひろこ)

### ❀ はじめに

「源氏物語」と聞いたときに、私達一般読者はある漠然とした世界、イメージを思い浮かべる。それは例え学問的な知識に基づいたものではなくても、平安貴族、宮廷、御簾に几帳、香を焚き染めた紙に書かれる文や和歌等々の「小道具」に彩られたものであり、読者の頭の中で光源氏の物語がひもとかれるのは、このような世界においてである。そして多くの読者にとって、これらの様々な「小道具」や慣習（袴着の儀、御幸、五節の舞……）の名前たちが織り成すイメージを堪能することこそが、源氏物語の世界に浸るということではないだろうか。

これらの「漠然とした、しかし物語を楽しむ上で非常に重要な」イメージを他の言語に翻訳することが果たして可能なのだろうか。それはテキストを構成している言葉のみに含まれているものでは、もちろんない。テキストが、特定の文化的知識を持つ読者に読まれることで、テキストと読者の間に創りだされる世界であり、そこには文化的背景に関する読者の知識が不可欠である。翻訳、とくに文芸作品の翻訳とはすなわち、この特定の文化的知識を持たない、あるいはそれが極端に限定された読者を対象にしたテキストを創り出すということでもある。

本プロジェクト、『十帖源氏』の『桐壺』章のスペイン語への翻訳においては、原文が日本の古典文学であるがゆえに、原文の想定読者と翻訳文の想定読者の文化的知識の差異は非常に大きいと思われる。このことを念頭に置きつつ、実際に翻訳を行うプロセスにおいて感じたことをいくつか以下に書いてみたい。

## ❁ 1 翻訳における「等価 (equivalence)」の概念について

「等価 (equivalence)」は、翻訳理論の中心的概念のひとつである。あるテキストを翻訳する場合、翻訳テキストは原文テキストと「同等の内容を伝えている」、すなわち等価であるべきだ、とは誰も考えることだろう。ではこの「等価である」とはどういうことなのか、と考えてみると、その定義は実はなかなか難しい。

原文テキストに含まれる言葉をすべて直訳すれば原文と等価の翻訳テキストができるわけでは、もちろんない。そもそも日本語とスペイン語のような互いに非常に異なる言語の場合は、それぞれの単語の「直訳」が何か、ということすら簡単に判断できない場合も多い。

そもそも原文テキストに含まれているのは、果たして、そこに「記載されている」情報のみなのだろうか。聖書の翻訳に携わった翻訳学の大家、Nida は、「原文と等価の効果を読者から引き出す」、「翻訳テキストにおけるメッセージとその受け手の関係が、原文テキストのそれと等価である」ことこそが原文と翻訳テキストの等価性である、と主張した (Nida, 1964 他)。つまり翻訳テキストを読むことで、その読者は原文テキストの読者と同様の体験をすべきである、ということになる。これは Nida が聖書の翻訳を行っていたことを考えれば、容易に理解できる主張であろう。そしてこれはまた、あらゆる文芸作品の翻訳に大きく関わってくる点でもある。翻訳者は、翻訳テキストの読者が原文テキストの読者と可能な限り「等価」の読書体験を持つべきである、と考える。すると、原文テキストと等価の翻訳テキストとは、単に原文テキストに書かれた情報をそのまま他言語に移し替えたものからは程遠いのではないか、ということになるのである。

なぜか。「等価の読書体験」とは、単に翻訳テキストのみではなく、翻訳テキストとその読者との関係において生み出されるものだからである。まず原文が文芸作品である場合、その読書体験においては文体が非常に重要となる。物語に含まれる情報とは、それだけでは骨組み (あら

すじ) にすぎない。読者が文芸作品を読むのは、物語が「どのように」語られているかを楽しむためでもある。本プロジェクトの場合は、『十帖源氏』は江戸時代に書かれたものだが、翻訳の原文テキストとなったのはその現代語訳であった。その現代語訳が「です・ます」調で書かれた、ものやわらかな語りかけの口調であり、また身分の高い登場人物への敬意は地の文で敬語を使って表現されていることなどは翻訳の原文テキストの特徴として挙げることができる。このような特徴を全く異なる言語であるスペイン語にそのまま移すことは不可能だが、可能な限り「等価の読書体験」を実現させるため、やわらかな語り口や敬意の表現、といった原文の特徴を翻訳プロセスにおいて意識することは重要であるといえよう。

また読書体験とは、冒頭で触れた「『源氏物語』の世界に浸る」という体験でもあり、そこには読者の持つ文化的背景に関する知識が関係してくる。既に述べたように、スペイン語翻訳テキストの読者に、平安時代の文化について日本語原文の読者と同等の知識を期待することはできない。これは、読者が「テキストに直截に書かれている以外のことを読み込む・感じ取る」ことを期待できないのみならず、「テキストに頻出する文化的レファレンスを理解する」ことを期待できない、ということでもある。すなわちここでも、翻訳テキストの読者が原文読者と「可能な限り等価の読書体験」を得るには、原文テキストの情報を単に他言語へと移し替えるだけでは不十分だ、ということになるのである。それでは、原文テキストに直接書かれていないがテキスト理解に必要と思われる文化的背景知識を補う、または原文テキストに使われている文化的レファレンスを読者に理解可能な形で翻訳するにはどのような翻訳方略(手法)が存在するのか。次項ではこの点につき、もう少し考えてみる。

## ❁ 2 文化的レファレンスの翻訳手法

原文テキストに出てくる文化的レファレンス、すなわち理解に文化的背景知識を要する単語や文章をどう翻訳するかという問題は、文芸翻訳

においては避けることができない。特に今回のような古典作品の場合は、現代文学の翻訳よりもさらに困難な課題となることが想像に難くない。

もちろん個々の文化的レファレンスへの対応はその都度判断していくべきだが、翻訳にあたり、まずは対象読者などを考慮に入れたうえでの全体的な対処方針を決めることは有用である。今回のプロジェクトの場合は、「高校生程度が読んでわかるような」形での翻訳という条件があった。これは対象読者に期待できる文化知識背景のレベルを規定するとともに、文化的レファレンスへの可能な対処法、すなわち使用可能な翻訳手法をある程度限定するのに役立つ。

ここで適用できる翻訳学上の概念が、Venuti の Foreignization (異化) および Domestication (受容化) である (Venuti, 1995 他)。前者は「翻訳テキストの読者を原文にできるだけ近づける」、すなわち原文に出てくる文化的レファレンスはできるだけその名称などを保ち、理解が難しい場合は訳注などを用いて説明する、というやりかたである。翻訳テキストの読者は、自分が読んでいるものは翻訳であり、その原文は違う文化圏に属する作品であるということを意識させられる。翻訳としては、情動的により原文に忠実な訳ということになるだろうか。これに対して後者は「翻訳をできるだけ翻訳テキスト読者に近づける」、つまり時には文化的レファレンスを対象言語の文化の類似名称に置き換えるなどして、翻訳テキストの読者が違和感なく読めるような翻訳を目指す。これは翻訳テキストの対象読者が幼かったり (児童アニメの翻訳など)、対象読者に文化的背景知識がほとんどないと考えられる場合に有効な手法である。テキストに含まれる情報よりも、読書体験が原文作品と類似のものとなるような翻訳、と言えるだろうか。

もちろん実際の翻訳にあたっては、相対するこの二つの概念のうちどちらか一つを選び、テキスト全体にそれのみを適応するということはない。通常は個々の文化的レファレンスを翻訳するときに、この二つのどちらにより近い方略を選ぶのかを毎回考えていくことになる。

文化的レファレンスの翻訳方略には様々なものがあり、Newmark (1988) などに詳しいが、ここではいくつかの例を『桐壺』から紹介す

るとどめる。

#### a. 背景情報の補完

原文にいくつかの単語を加えることで翻訳テキストの読者に必要と考えられる情報を付け加える場合と、訳注を使用する場合がある。前者は例えば、「〈村上天皇〉の十番目のお姫さまである〈選子内親王（大齋院）〉が・・・（以下略）（1裏）」と始まる現代語訳版を、翻訳では "En la época de Heian , la princesa Senshi (también denominada Dai-Saiin), la décima hija del emperador Murakami..." と始めているが、翻訳では冒頭の下線部分、「平安の時代に」という情報が付け加えられている。

欄外に訳注をつけるのではなく、このように文中に直接情報を加える場合があるのは、翻訳テキスト読者の読書体験ができるだけスムーズなものであるように、という配慮である。しかし補完情報がより多量である場合には、この手法は使えない。説明的な文章が増えることでかえって読書体験の質が落ちると考えられるためである。その場合は、訳注を使用することになる。例えば上記の例では、「村上天皇」と「大齋院」の二語に訳注がつけられている。「村上天皇」の訳注は「日本の62代目の天皇。在位は946年から967年まで」（日本語訳。以下同）との内容をスペイン語で記載した簡単なものだが、「大齋院」には「この時代には、人々は本名のほかに役職や位などで呼ばれることが多くありました。例えば選子の場合は、大齋院とも呼ばれていますが、これは京都の加茂の齋院（未婚の皇族の女が務める神職）を57年間務めたところからきています。」とかなり長い訳注となっている。これは神職の内容のみではなく、本テキストで何度となく出てくる「人物の名前が二つ以上ある」点についても説明しておく必要があると考えられたためである。

#### b. 人物の名前、官位など

上記の点とも関係するが、人物の名前は本稿の翻訳上の対処が必要な文化的レファレンスの一つであった。これは登場人物の名前をそのま

ま使用できる現代文学作品の翻訳とは異なる点である。『十帖源氏』では、①人物の本名が不明である、②官位、住居などの名称を人物の名前に使用する、③一人の人物に複数の名前がある、または途中で呼び名が変わる、などの特徴が挙げられる。①の人物の本名については、例えば現代語訳では主人公は「光源氏」「光る君」「若君」の呼び名があるが、いずれもいわゆる「本名」ではない。翻訳では「光源氏」を Hikaru Genji とし、その由来を初出時に説明し (“Se llamó Hikaru Genji, «el príncipe brillante».” – 「その名を光源氏 (光り輝く君) と言いました」 3裏)、これを主に使用した。また、その母である「桐壺の更衣」は②の住居、および位がその呼び名となっている。これは「桐壺」(Kiritsubo, “Patio de Paulownia” – 桐壺、「桐のある中庭 (のある住居)」 3表)、と説明したあと、原文の「この桐壺に住んでいる更衣」を “la dama de rango Kōi que vivía en el edificio Kiritsubo (por lo cual era llamada Kiritsubo no Kōi)” (“桐壺の建物に住まう更衣という位の貴婦人 <そのため桐壺の更衣と呼ばれた>” 3表) とし、以下 Kiritsubo no Kōi を名前として使用した。③については、上記の「選子内親王」の例に見るとおりである。

これらはいずれも Foreignization の例であり、可能な限り原文に翻訳を近づけている。しかし紫式部の系図 (2表) は、原文の「紫式部の系図 堤中納言兼輔—因幡守惟正—越前守為時—女 (紫式部)」を翻訳では “Fujiwara no Kanesuke – Fujiwara no Masatada – Fujiwara no Tametoki – la hija (Murasaki Shikibu)” とし、欄外に「昔は貴族の女性を本名で呼ぶことはあまり行われていなかったため、紫式部や彼女の母親の本名は今日でも不明となっています。藤原の兼輔、雅正その他は一族の男性の名前です」と訳注を加えた。すなわちまず官職ではなく本名としており、これは Domestication の例と言える。さらに、系図といいながら男性の名前しかないのはスペイン語読者には奇異にうつり、またそもそもこれらの名前が男性名か女性名かわからないことが予想されるため、訳注で背景情報を加えている。



### c. 慣習など

最後に、当時の慣習などに関わる文化的レファレンスの翻訳例をいくつか挙げておきたい。例えば9裏には「大人になってからは、子供の時のように〈藤壺〉と同じ御簾の中にも入れません。」という一文がある。この「御簾の中」は単に「竹で作られたスクリーンで区切られた空間の内側」ではなく、この文脈では「子供以外の男性には簡単に入ることのできない空間」であり、そのように訳されなければならない。翻訳では、" Como Hikaru era ya adulto, no se le permitía entrar en los espacios reservados a las damas, separados por cortinas de bambú, para estar con Fujitsubo como antes."（「ヒカルは既に大人であり、以前のように、竹のカーテンで仕切られた女性たちの空間に入り込み、藤壺と一緒にいることはできませんでした」）とした。「袴着の儀式」（4裏）などについても同様である。

しかし、9表の「左馬寮という役所が所有する馬に、蔵人所という役所が所有する鷹を添えて、〈左大臣〉にあげました。」という一文では、左馬寮、蔵人所という文化的レファレンスの内容を理解することは文脈上重要ではないと判断し、その部分は単に " un caballo y un halcón que pertenecieron a la Corte"（「宮廷の所有する馬と鷹」）と訳すにとどめている。

### ❁ おわりに

本稿では、『十帖源氏』のスペイン語訳にあたり翻訳上の課題となる文化的レファレンスの翻訳に焦点をしばり、いくつかの例を見てきた。文学作品の翻訳においては、翻訳テキストの読者が可能な限り原文読者と等価の読書体験を愉しむことができるような翻訳を心がけるが、「等価の読書体験」の内容は、翻訳テキストの想定読者がどの程度の文化的背景知識を有しているかによって大きく異なる。翻訳にあたっては、想定読者に期待できる文化的背景知識を念頭におきながら、情報の補完または変更、省略などを、さまざまな方略で行っていくことが必要となる

のである。

### 参考文献

Newmark, P. (1988), *A Textbook of Translation*, Oxford and New York: Pergamon

Nida, E.A. (1964), *Toward a Science of Translating*, Leiden: E.J. Brill

Venuti, L. (1995/2008), *The Translator's Invisibility: A History of Translation*, London and New York: Routledge

(ダーラナ大学 上級講師／グラナダ大学 客員教員)

## 『十帖源氏』 「桐壺」 卷のウルドゥー語訳によせて

村上 明香  
(むらかみ あずか)

ウルドゥー語はパキスタンの国語 (National Language) であり、インドでは憲法によって 22 の指定言語 (Scheduled Language)<sup>1</sup> のひとつに定められている。宗教や地域の垣根を越えて、インド亜大陸の広大な地域に居住するあらゆる宗教集団の成員によって話されているが、過去 300 年、その主たる文学言語として使用してきたイスラーム教徒と密接な関係を維持している。

ウルドゥー語の持つこの言語的特徴は、今回の翻訳で特に注意した部分のひとつである。というのも、イスラーム教徒と密接な関係にあるため、宗教的な表現がどうしてもイスラームと結びついてしまうからである。そのひとつに、故人の名前につける「故」や「亡き」にあたる語をどう訳すか、という問題があった。1971 年にインド国立文学アカデミー (Sahitya Akademi) から刊行されたウルドゥー語訳『源氏物語』<sup>2</sup>の中で、訳者サイヤド・エヘテシャーム・フサイン Syed Ehtesham Hussain (1912- 1972) は、アラビア語起源の「マルフーム (男性形) / マルフーマ (女性形) marḥūm/marḥūmah アッラーの慈悲を受けたの意」という語を使用した。しかし、この語は一般的にイスラーム教徒にのみ付与されることに加え、死者復活の教義をもつイスラームでは火葬はタブーとされている。この問題をめぐって 1975 年、ある論争が起きた。ウルドゥー現代詩壇の異端児と呼ばれる詩人ヌーン・ミーム・ラーシド Noon Meem Rashid (1910-1975) がロンドンで客死した際、彼の遺言

1 インド憲法第 8 附則で定められている言語で、話者人口が多い、ないしは言語的文化的に重要であるとして政府によって保護と振興が義務付けられている言語。

2 Laidī Mūrāsākī, Sayyid Ihtishām Husain tr., Ginji kī kahānī, New Delhi: Sahitya Akademi, 1971 はこれまでにウルドゥー語に翻訳された唯一の『源氏物語』で、「桐壺」から「葵」までが収録されている。底本についての記載はないが、訳文を吟味するとアーサー・ウェイリーの英語訳をもとにしたことがわかる。

によって遺体は茶毘に付された。当時、パキスタンの新聞では「マルフーム」をつけて彼の死が報じられたが、土葬ではなく火葬を望んだ彼はイスラーム教徒ではないため、非イスラーム教徒に用いられるペルシャ語起源の「アーン・ジャハーニー (ān jahānī) 来世へ向かったの意」を使用すべきだ、との議論が起きたのである。以上を踏まえ、非イスラーム教徒であり茶毘に付された桐壺の更衣に「マルフーマ」をつけることは躊躇われた。よって、今回の翻訳では「アーン・ジャハーニー」を用いることとした。

もうひとつの例として「観音」がある。仏教はインド由来の宗教であり、観音の梵名はアヴァローキテーシュヴァラ (Avalokiteśvara) である。しかしこの梵名は難解であると判断し、「慈悲と慈愛の女神」と訳した。観音は男女の区別を超越した存在であり性別はないとされるが、ウルドゥー語では文法上、男性形、女性形の区別がありどちらかを採用しなければならなかったこと、また、観音は変幻自在に姿を変えてわたしたちの前に現れるとされていることから、「観音の化身」とされる紫式部の性別を採用し「女神」とした。

翻訳上でもっとも難しかったのは、官位名や儀式名などの固有名詞である。ここでは例として「桐壺」巻に登場する「袴着の儀式」「読書始めの儀式」「元服」の3つの儀式を挙げて、今回の翻訳における工夫について述べることにしたい。前出のエヘテシャーム訳ではウェイリー訳の「the putting on of the trousers」「began to learn his letters」「initiation」を受けて「衣着せの儀式」「教育が始まった」「お披露目」と訳されている。しかし、これでは本来の意味が伝えきれていないと考え、今回の翻訳ではこれらを「初めて儀礼用の衣装を身に着けさせる祝いの儀式」「勉学始めの儀式」「成人の儀式」とした。こうした日本独特の儀式や風習などについては、説明調になってしまっていることは否めないが、エヘテシャーム訳よりも読者により鮮明なイメージを持ってもらうことができるだろう。

ウルドゥー語の特徴のひとつとして、韻文文学が盛んであることが挙げられる。特に恋愛を主題とした詩はウルドゥー文学の精髓であると

いっても過言ではない。『源氏物語』の中で詠まれる和歌をウルドゥー語の詩の形式で翻訳すれば、読者の関心をさらに惹きつけることができるだろう。しかし韻律などの問題上それが困難であったため、和歌の意味を散文体で書き記した。なお、ウェイリー、エヘテシャームともに散文体で意味を説明するにとどめている。

ウルドゥー語非母語話者が日本語からウルドゥー語に翻訳をする上で課題となるのが、いかに流暢な文章が書けるかということである。文法は完璧でも、文章のリズムや表現方法といった点でどうしても母語話者と差が出てしまう。さらに文章単体のみならず、物語全体の流れも考慮しなければならないため、難易度はさらに高くなる。この課題をクリアするため、留学先であるインドの複数の文学者や研究者の方々にアドバイスをいただき、今回の翻訳が完成した。

(インド国立アラールハーバード大学 大学院博士後期課程)



# 研究の最前線







## スペインにおける平安文学事情

清水 憲男  
(しみず のりお)

2, 3 日前までスペイン北部の、居住者 8 人という山奥の寒村で、昔馴染みの古書店主の自宅にお世話になっていました。想像を絶する田舎でインターネットはおろか、携帯の電波も届きません。ある程度の資料を自分のオンライン・ストレージからタブレットで起こして、今回ご依頼いただいた拙稿を準備せんととの企みは挫折し、泥縄状態で慌てています。

端的に申し上げますと、スペインにおける日本研究は比較的初期の段階にあります。文学以前に「日本通史」でも、安心して推薦できるものはありません。文学に限定した場合、当然心細くなるわけです。それでもドナルド・キーン先生の小著 *Japanese Literature* (London, 1953) は早くも 3 年後、つまり約 60 年前にスペイン語訳されてメキシコで刊行され、幸いスペインにも支社があるほどの大手出版社だったため、当地でもそこそこ読まれてきました。

今回のお話は「平安」に特定されていますので、ご紹介も極度に限られてしまいます。それでもここ約 30 年、いくつかの出版社の積極姿勢に助けられ、英訳や仏訳には及ばないものの、古典がそれなりに翻訳紹介されています。以下の翻訳作品は私の側で断らない限り、日本語原典からの訳だをご理解ください。また『土佐日記』、『蜻蛉日記』など重要な作品の翻訳がペルーやメキシコで出ていますが、本稿の性格上、以下では原則的に割愛させていただきます。同じく本来「翻訳」とは別の「研究」についても、私の非力と限られた紙幅からして割愛いたします。

日本最古の物語とされる『竹取物語』は 2004 年にスペイン語に翻訳されて入手も容易ですが、実は意外なことに 1933 年の時点で『日本の伝説と物語』(バルセロナ) と題する書に収録されています。翻訳したのはドミニコ会宣教師です。『竹取物語』が書かれた頃と近い作品とし

ては『古今集』（2005年）があります。訳者は現在スペインでもっとも精力的に日本文学を翻訳かつ広範に論じておいでの Carlos Rubio 氏（東大元客員教授）で、私もマドリードでお目にかかる機会があり、教えられるところが少なくありません。同氏には『更級日記』（2009年、共訳）の他、最近では鎌倉中期、無住一円の『沙石集』の学術的価値が極めて高い翻訳があります。

『伊勢物語』は仏語からのスペイン語訳もありますが、1977年（パンプローナ）、1988年（マドリード）と続けて、同じ Antonio Cabezas による日本語からの訳が出ており、訳者はスペインにおける日本文学紹介の草分けの一人です。2010年には別種のスペイン語訳も出ているようですが、私は未見のままです。

『枕草子』はアルゼンチンとペルーでそれぞれ出版されていますが、アルゼンチンの文豪ボルヘスとマリア・コダマ（ボルヘス未亡人）による英訳からの抄訳が、2004年にマドリードの大手出版社から出ています。ボルヘスという圧倒的なネーム・ヴァリューのある人物名が冠されていることもあり、スペイン人読者の間でかなり浸透度が高いようです。

そして『源氏物語』ですが、初訳は重訳かつ抄訳で、1941年にバルセロナで出ています。訳者は1933年のウエイリーの英訳と28年の山田キクの仏訳を使っています（このスペイン語版は1992年に、南のマジョルカ島で再版）。そして奇しくも同じ2005年に、二種類の全訳がカタルーニャ地方の出版社から出ます。一つはロイヤル・タイラーの英訳からのスペイン語訳（ジローナ市）、もう一つは各種英訳や仏訳を参照したものです（バルセロナ）。前者訳者は Jordi Fibla、後者は Xavier Roca-Ferrer です。共に出版時には、スペインの新聞でかなり大きく紹介されたのが、私の記憶に残っています。

西行の有名な「年暮れぬ 春来べしとは思ひ寝に まさしくみえて かなふ初夢」をはじめ『山家集』を軸とした選集（ローマ字表記の日本語とスペイン語訳の対訳版）がアメリカ在住のキューバ詩人ホセ・コセールによって『月鏡』（Espejo de la luna）と題され、マドリードの出版社から1989年に出ています。序文や解説が一切ない「ぶっきらぼうな」

訳書ですが、この訳書については私が別のところで少しく書いたことがあるので、ここではこれだけにしておきます。

最後に南米ベネズエラでの出版ですが、平安文学でもあり、例外として言及させていただきたいのは、日本人の元外交官伊藤昌輝氏による、後白河法皇の『梁塵秘抄』の抄訳ながら見事な翻訳です。同氏には『方丈記』、『閑吟集』などの翻訳紹介もあり、今後益々のご活躍を期待したいと思っています。

私がかうっかり見落としした翻訳もありましょうし、もとより網羅を試みたものでもなく、そもそも私はこの分野の素人に過ぎず、思わぬ勘違いもありましょう。ただ素人なりに、たとえば『日本霊異記』、『往生要集』、『和泉式部日記』、『和漢朗詠集』、『堤中納言物語』、『大鏡』等々の作品を、スペイン語に翻訳してくださる人の台頭を待ちたいと思います。ただしこのうち『和泉式部日記』は近刊予定という朗報が入っています。

ここで、本筋から離れるようであるが、見逃してはならない事項を二つ指摘しておかねばなりません。第一は翻訳における「原文至上主義」についてです。先にも言及したように、スペインにおける日本文学の翻訳紹介は、1941年の『源氏物語』の抄訳を初め、「重訳」を基本としてきました。重訳の元が英語であれ仏語であれ、「重訳」というだけで眉をひそめられがちです。原文の意味内容を十全に把握した上での直接訳が望ましいのは言うを待ちません。その意味で今回の下野・Pinto Román 両氏の『源氏』は、一つの理想を体現したものだといえましょう。文学の場合、外国語力はもとより、なによりも母語の表現力が問われます。今年がスペインの神秘主義者イエズスの聖女テレサ生誕500周年に当たり、日本でも多少の動きがあります。彼女の主要著作『靈魂の城』はスペイン語原文からの翻訳が近年出ているものの、仏語訳を介した1948年の重訳の方が優れています。仏語版そのものが優れていたこともあるでしょうが、それを日本語に訳した人の日本語力、そして原著者の思想背景などに通暁していたからに他なりません。

もう一つ指摘しておかねばなりません。概してスペインの読書人レベルは高いとは言えません。ところが日本と異なるのは、破格の教養・知

識人の存在です。一握りとは言え、その人たちの学識の幅と深さは、概して日本のそれの比ではなく、私自身、今まで幾度となく驚嘆させられてきました。現代スペイン詩壇を牽引する一人P・ジンフェレルと20年以上前に話していた際、「自分は毎晩、寝る前に『源氏物語』をフランス語で読んでいる」と、何気なく言っていたのが思い出されます。また同じく代表的な現代詩人J. M. アルバレスの詩には平然と「小堀遠州」が引用され、L. A. デ・ビリエーナの詩には「俵屋宗達」が登場……枚挙にいとまがないほどで、彼らはジャポニズムや近代主義にならってエキゾチズムを求めているのでも術学的な態度を取っているわけでもなく、自分の美学の一部として追求して取り入れている……それだけです。日本語はともかくとして、英語、仏語、伊語などはもとより、多様な言語を駆使して日本文化・文学を享受します。こうした破格な教養人にとっては、日本の重要作品がスペイン語に翻訳されていないことは、実は意外なほど問題になりません。

冒頭に言及した古書店で今回たまたま見つけた85年前の小著『外国におけるスペイン語およびスペイン文化の教育と普及に関する省察』に、異文化を学ぶことは新しい「知的喜びを意識すること」との言葉がありました。平凡な指摘のようではありますが、この言葉の重みをひるがえって噛みしめる価値は十分ありそうです。

マドリードの仮寓にて

(上智大学 名誉教授)

## 新刊紹介：朴光華著『源氏物語—韓国語訳注—』（桐壺巻）

巖 教欽  
(オム キョフム)

今回、伊藤鉄也先生のご依頼で、韓国の鮮文大学の朴光華先生による『源氏物語—韓国語訳注—』（桐壺巻）を紹介することになりました。私は『源氏物語』専門ではなく、その周辺の知識も浅い上に紹介文というものの自体を初めて書きますので、朴先生の御著書についてどこまで紹介できるのか不安ですが、いささかでも紹介できれば幸いです。伊藤先生がご自身のブログである「鷺水亭より（2015年9月6日）」(<http://genjiito.blog.eonet.jp/default/2015/09/post-6180.html>)に、私より先に紹介文をお書きになっていますので、合わせてご参照いただければと思います。

まず、本書の構成は次のようになっています。この順に沿って紹介させていただきたいと思います。

1. 序
2. 『源氏物語—韓国語訳注—』（桐壺巻）の目次（小見出し）
3. 凡例
4. 桐壺巻の概要及び登場人物系図
5. 桐壺巻（小見出し別に日本語本文、韓国語訳、韓国語注の順）
6. 源氏物語について（1）（韓国語）
7. 桐壺院の贖罪（伊井春樹）
8. 後記（日本語）
9. 図録

序文には、どのような方針でこの本を執筆なさったのかが書かれているので、その一部を引用させていただきます（以下、日本語訳は筆者による）。

一桐壺(키리쭈보)卷의 구성은 日本語本文(古文)、韓國語訳、韓國語注釈으로 되어있다. 日本語本文은 古文으로 되어있다. 韓國語訳 부분은 『源氏物語』의 일반 독자들이 읽고 이해할 수 있도록, 특히 마음을 써서 번역하였다. 韓國語注釈 부분은 대학교원 및 대학원생 등의 연구자들을 위해서 집필하였다. (序文より抜粋)

(桐壺卷の構成は日本語本文(古文)、韓國語訳、韓國語注釈からなる。日本語本文は古文になっている。韓國語訳部分は『源氏物語』の一般読者が読んで理解できるように、努めて訳した。韓國語注釈部分は大学教員及び大学院生のような研究者のために執筆した。)

朴先生は本書を執筆するにあたって、一般読者と研究者、両方に役立つ本を目指されたそうです。後述しますが、このような目標意識が「日本語本文—韓國語訳—韓國語注」という形式を決定付ける要因であったかと思われれます。そして、この本を執筆した理由について次のように述べられています。

—(『源氏物語』는) 日本뿐만 아니고 해외에서도 많이 번역되어서 널리 읽혀지고 있는, 日本古典문학작품의 하나이다. 『源氏物語』는 위대한 작품이다, 日本古典문학의 최고봉이다, 白眉이다 라고 말하여지고 있기는 하지만, 日本의 『源氏物語』 연구자들이라 하더라도, 五十四卷이란 一大長編을 通讀한다는 것은, 상당한 忍耐力과 努力이 요구되어지는 그러한 작품이다. 결코 편한 읽을거리는 아닌 것이다. (중략) 本書가 우리나라에 있어서 『源氏物語』 연구의 第一歩가 되면 多幸으로 생각한다. (序文より抜粋)

((『源氏物語』は) 日本だけでなく、海外でも翻訳され広く読まれている、日本古典文学作品の一つである。『源氏物語』は

偉大な作品である、日本古典文学の最高峰である、白眉である、などと言われているが、日本の『源氏物語』研究者であっても、五十四巻という一大長編を通読するという事は、相当な忍耐と努力が必要な、そのような作品である。決して読みやすいものではないのである。(中略)本書が韓国における『源氏物語』研究の第一歩になれば幸いである。)

『源氏物語』が日本古典文学において重要な存在であることは、海外でも翻訳本が出版されることから確かなことではありますが、全54巻という壮大な規模は研究者にさえ忍耐と努力を要するものがあり、ましてそれが韓国の一般読者をも視野に入ると原文は決して「読みやすいもの」ではありません。そのように大きな意義を持つ作品に韓国語訳をつけることは「読みやすいもの」にする第一歩であり、それはまた研究への接近性を高める第一歩であると朴先生は言われます。

目次によると、桐壺巻は全17の段落に分けられ、それは底本とした日本古典文学全集『源氏物語』(阿部秋生、今井源衛、秋山虔。小学館、1989年)に拠っているそうです。そして凡例には一般的な編集方針以外にも、韓国語注の部分に見える古典文法の一覧をも載せていますが、簡略なものではあるものの、本文を読むにあたっては必要な情報であり、日本の古典文に慣れていない韓国の読者に対する配慮であるかと思えます。桐壺巻の概要及び登場人物の系図は岩波書店の『大系』と『新大系』によるもので、あらずじと人物の系図をもって、理解を助けます。

本文は大きく分けて三つに分けられています。まず日本語の古典本文があり、それに対する韓国語訳が付され、韓国語注が続きます。参考までに、あまりにも有名な桐壺巻の冒頭部を挙げますが、朴先生の韓国語訳、それに基づいた筆者の日本語訳、日本古典文学全集『源氏物語』の現代語訳を並べておきました。

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおもしめそねみたまふ。

어느 天皇 (천황) 의 시대였던가, 많은 노우고 (女御)・코우이 (更衣) 가 天皇에게 시중들고 있었던 속에서 그다지 높지 않은 신분 (身分) 으로, 두드러지게 天皇의 사랑을 받고 있는 분이 있었다. 입궐당시부터 나아말로 天皇의 사랑을 받을 수 있다고 자부 (自負) 한 다른 후궁 (後宮) 들은, 이 키리쭈보 (桐壺) 天皇의 사랑을 독차지하고 있는 키리쭈보노코우이 (桐壺更衣) 를 눈에 거슬리는 女子로 업신여기고 미워하였다.

(どの天皇の時代であったのだろうか、天皇にお仕えする多くの女御・更衣の中で、それほど高くない身分で、一際天皇に愛された方がいらしかった。入内した当時から自分こそ天皇に愛されると自負した他の後宮(訳注:韓国語では帝や王の正式な妻である皇后や王妃以外に妻として娶った女性を指す)たちは、この桐壺天皇の愛を独り占めしている桐壺更衣を目障りな女と考え、憎むのであった。)

—どの帝の時代であったか、女御や更衣が何人もお仕えしておられる中に、たいして重々しい家柄ではない方で、目だって帝のご寵愛をこうむっていらっしゃる方があった。宮仕えの初めから、我こそはと自負しておられた方々は、この方を、目に余る者とさげすみもし憎みもなさる。(日本古典文学全集『源氏物語』の現代語訳)

前述したように、朴先生は一般読者をも想定して韓国語訳を付されたようですが、原則として、古典本文から直接訳する方針であったかと思われれます。同時に必要に応じては、古典本文に情報を補ったような部分もあって、読み手の理解を助けるための処置かと思えます。一方で、原文からの訳に徹されたためではないかと思われれますが、例えば、「父の



大納言」が「父인 다이나곤 (大納言)」と訳されているように、韓国語の単語やハングル表記で意味が通じる (父⇒아버지、にするなど) 箇所には漢字があてられたために、逐語訳的な印象を与える点、また「키리루 보노코우이 (桐壺更衣)」「뉴우고 (女御)」のように、韓国における外国語表記法 (大韓民国外来語表記法第 85-11 号) に適していない表記が見られる点、この二点はやや気になったところです。

注釈は、凡例に抛りますと注釈に用いられた注釈書は次の通りです。

- 『日本古典文学全書一』(池田亀鑑、朝日新聞社、昭和 41 年第 1 版)
- 『日本古典文学大系一』(山岸徳平、岩波書店、1989 年第 35 刷)
- 『源氏物語評釈第一巻』(玉上琢彌、角川書店、平成 5 年 20 版)
- 『日本古典文学全集一』(阿部秋生、今井源衛、秋山虔、小学館、1989 年第 25 版及び昭和 45 年初版)
- 『日本古典文学集成一』(石田穰二、清水好子、新潮社、昭和 51 年)
- 『新日本古典文学大系一』(柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎、岩波書店、1993 年第一刷)

以前伊藤先生もご自身のブログで書かれたように、「『源氏物語』の本文が 1 に対して、ハングル訳が 1、そして注釈が 3 の割合で進行している」ので、「注が数ページにわたる (2010 年 7 月 5 日)」(<http://genjiito.blog.eonet.jp/default/2010/07/post-03f2.html>) 形になっています。それぞれの注の出典は『全書』『大系』などのような略語で区分されていますが、最初の段落の注の内訳を表すと次のようになります。もちろん箇所によってどの注釈書に大きく抛るのか変わるとは思いますが、本書の注がどのような仕組みになっているのか、その傾向と形は分かります。

注出典 注番号	全書	大系	評釈	全集	集成	新大系	その他
1	○	○	○	○	○		
2			○	○		○	
3				○		○	
4		○				○	
5			○				
6		○	○				
7			○			○	
8		○	○				
9						○	
10		○				○	
11		○		○			
12							○
13			○			○	
14		○	○				
15		○	○	○		○	
16		○	○		○	○	
17			○				
18			○				
19		○	○	○			
20						○	
21		○	○			○	
22		○					
計	1	12	14	6	2	11	1

続く「源氏物語について」(1)は、解説にあたるもので、約70ページにわたって次のような内容となっています。

- (1) 中古時代 (2) 中古文学の流れ
- (3) 仮名文字の発明と和歌、散文の展開
- (4) 女流文学の開花 (5) 源氏物語 (6) 名称について
- (7) 巻数 (8) 巻名 (9) 巻名の由来及び異名について
- (10) 「並びの巻」について (11) 作者について
- (12) 執筆動機について (13) 執筆時期及び期間について
- (14) 成立順序、過程について
- (15) 構成について(一、二、三部のあらすじ)
- (16) 主題について
- (17) 表現、文体について (18) 価値、文学史的定位について

(1) から (4) までは『源氏物語』が成立する前までの時代背景や文学史の概観、(5) からは『源氏物語』に関する内容になっています。ここで説明されていない事項（年表、題材、準拠（モデル論）、思想、表現、草子地、虫物語論、『源氏物語』の諸本、注釈書、研究史など）は、続刊の夕顔巻に「源氏物語について」(2) として掲載される予定です。

解説の次には「桐壺院の贖罪」という題で、醍醐天皇の墮地獄説話の内容から桐壺院の光源氏に対する贖罪を考察された伊井春樹先生の論文があり、続刊の夕顔巻では糸井通浩先生の論文が掲載予定だそうです。

以上、朴先生の『源氏物語—韓国語訳注—』（桐壺巻）の構成に沿ってその概略を一通りみてきましたが、まさに「労作」の一言に尽きるかと思えます。古典本文を韓国語に訳し、それに6種類もの注釈を比較して注を施すことは、容易にできることではありません。朴先生の後記によりますと、この桐壺巻は2002年『文華』（日本文学研究会）という雑誌で初めて公開され、あしかけ13年の年月を経てこのように本として出版されたものです。そしてこれからも続刊の夕顔巻をはじめ、前期・後期にわけて14年間引き続き自費で出版される予定だそうです。私も古典に携わる研究者の一人として、朴先生のこの一連の御研究が韓国における『源氏物語』研究に寄与するとともに、一般読者の『源氏物語』に対する認識をも広めてゆくことをお祈りいたします。

(東京大学大学院 博士課程)

